

**柿木原地下式横穴墓56-1号**

**江田原第1遺跡**

**宮崎市文化財調査報告書**

**1989**

**宮崎市教育委員会**

## 序

宮崎市では大型開発に伴う埋蔵文化財等の発掘調査が増加するなかで、個人、民間による小規模開発に伴う埋蔵文化財調査も増加する傾向にあります。

ある一定規模の開発計画については、事前協議や届け出によってその開発区における埋蔵文化財等の分布及び存在確認が成され、事業者による計画事業遂行にあたっては、記録保存措置としての発掘調査を実施しているところであります。ところが、小規模開発につきましては、周知の遺跡を除く個所においては、実際工事に着手してから遺跡の発見が成され、緊急に発掘調査を実施しなければならない機会に遭遇することも多くなってきております。

本報告書は、そうした緊急に発掘調査を必要とした柿木原地下式横穴（昭和56年調査）及び江田原第1遺跡（昭和62年調査）の発掘調査報告書であり、特に、柿木原地下式横穴につきましては、昭和56年の発掘調査以来、調査の概要報告等は成されてきたところでありますが、今回、かかる地下式横穴より発見された、極めて保存状態の良い埋葬人骨について、長崎大学医学部解剖学第二教室の松下孝幸助教授より人骨所見等の玉稿もいただきましたので、併せて刊行することと成りました。

また、江田原第1遺跡では八紘焼窯元、[ ] のご協力により弥生時代の砂丘立地遺跡の調査が実施されたことに感謝申し上げたいと思ひます。

なお、それぞれの遺跡発掘調査におきまして、貴重なご指導、ご助言をいただきました先生方、並びに作業に従事していただいた方々に感謝いたします。

平成元年 11月

宮崎市教育委員会

教育長 柚木崎

敏

## 例　　言

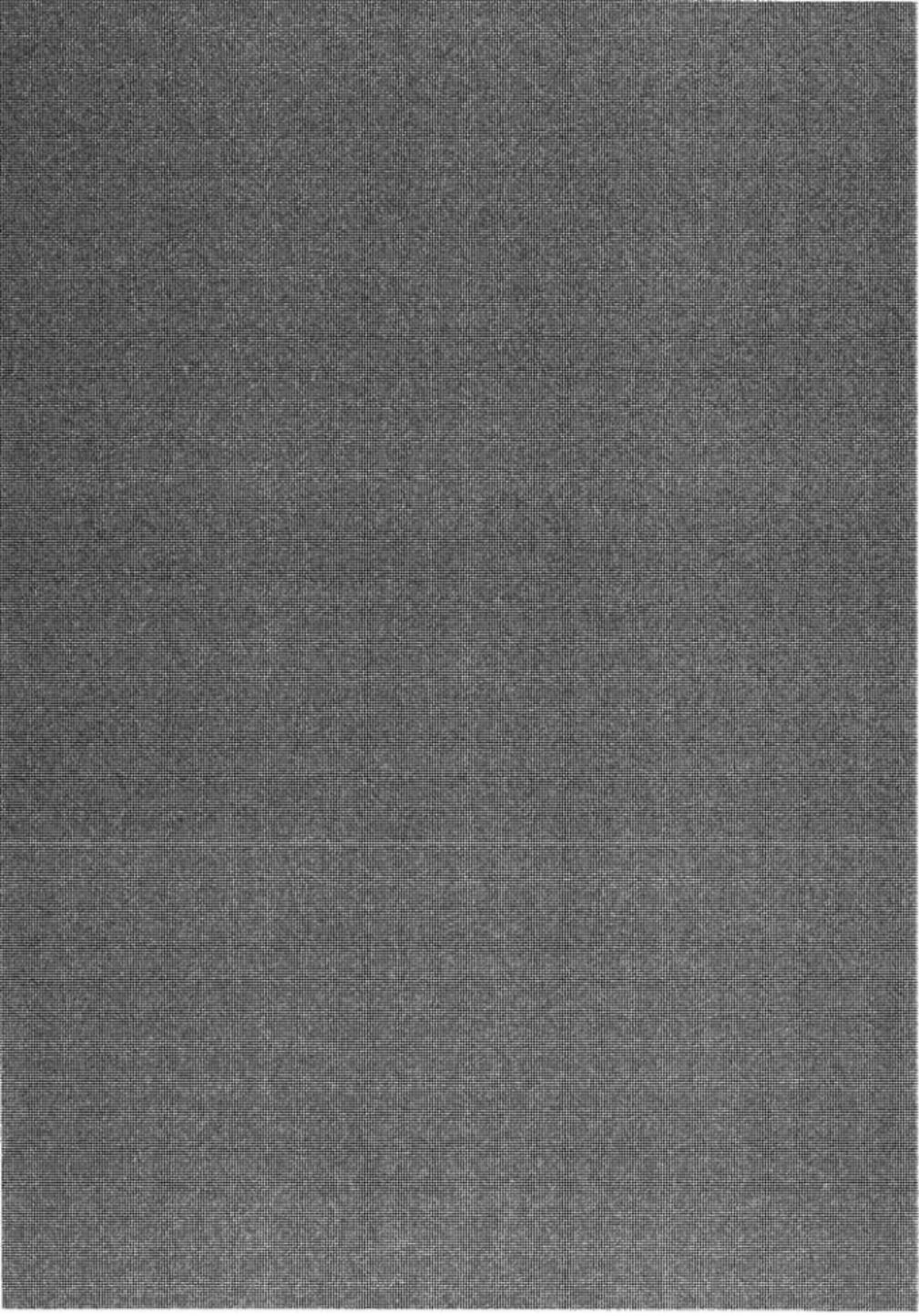
1. 本書は、宮崎市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 柿木原地下式横穴墓56-1号は昭和56年度に、江田原第1遺跡は昭和62年度に、それぞれ緊急発掘調査として実施したものである。
3. 本書に掲載した発掘調査組織及び関係者における職名は調査当時のものとした。
4. 柿木原地下式横穴墓56-1号には、極めて保存状態の良好な人骨埋葬が見受けられたため、長崎大学医学部解剖学第二教室に応援協力を依頼し、同教室より松下孝幸講師（現助教授）、分部哲秋助手（現講師）に来宮していただき、現場作業に携わっていただいた。なお、人骨所見について、大変ご多忙な中に、玉稿をいただいたので、本報告書に収録させていただいた。
5. 本報告書の執筆は「柿木原地下式横穴墓56-1号」を野間が主体となって行い、「江田原第1遺跡」は荒武が行った。
6. 本報告書に掲載した図面の実測、製図及び図版の作成は、荒武が主体となって行った。
7. 本報告書の編集は、荒武が主体となって行った。
8. 本報告書に関する出土遺物は、宮崎市教育委員会が保管している。

## 総 目 次

柿木原地下式横穴墓56-1号	1
宮崎市柿木原地下式横穴墓出土の古墳時代人骨	13
江田原第1遺跡	31



柿木原地下式横穴墓  
56-1号



## 本文目次

I.はじめに .....	1
1. 発掘調査に至る経過と調査の組織 .....	1
2. 遺跡の立地と環境 .....	1
II. 調査の概要 .....	3
III. 遺構と遺物 .....	4
1. 遺構の構造 .....	4
2. 地下式横穴の構築土層 .....	5
3. 遺 物 .....	5
IV. 結 語 .....	6

## 挿図目次

第1図 植木原地下式横穴墓56-1号発掘調査地点とその周辺 .....	2
第2図 植木原地下式横穴墓56-1号遺跡周辺地形図 .....	3
第3図 植木原地下式横穴墓56-1号実測図 .....	4
第4図 刀子実測図 .....	5

## 図版目次

図版 1 植木原地下式横穴墓56-1号発掘調査地点（調査終了後・北から） .....	9
図版 2 植木原地下式横穴墓56-1号堅壙・羨道入口 .....	9
図版 3 羨道入口から奥壁をのぞむ .....	10
図版 4 玄室入口から .....	10
図版 5 玄室内部（南西から） .....	11
図版 6 玄室内部（頭部付近） .....	11
図版 7 屑床および埋葬人骨の状況 .....	12
図版 8 刀子の出土状況（矢印）および刀子 .....	12



# I はじめに

## 1. 発掘調査に至る経過と調査の組織

昭和56年8月7日、宮崎市大瀬町の市道、柿木原一岩知野線（1774番地2隣接地）において、水道工事中に地下式横穴玄室部の天井部分から陥没したという連絡があり、現地調査を行ったところ、地下式横穴墓に間違いなく、埋葬人骨の存在が確認された。

遺跡の所在する位置が市道の地下にあたり、民家への出入口でもあることから、緊急発掘調査を実施し、記録保存に努めることになった。

発掘調査は、宮崎市教育委員会が主体となって、昭和56年9月16日から9月21日にかけて行われた。調査の組織は次の通りである。

調査主体 宮崎市教育委員会

教育長 黒木 定彌

教育次長 後藤 立身

社会教育課課長 山田 義男

同 補佐 松山 耕吉

同 主事 野間 重孝（発掘調査主任者）

同 嘴託 緒方 博文

調査指導・協力 松下 孝幸（長崎大学医学部解剖学第二教室派遣）

分部 哲秋（ 同 ）

なお、この調査に当たっては、遺跡が市道の地下にあったこともあり、道路の掘削、交通止めなどが必要であったが、関係各機関、地元関係者はじめ多くの方々のご理解とご協力をいただいて無事に調査を終了できたことを一言感謝申し上げておきたい。

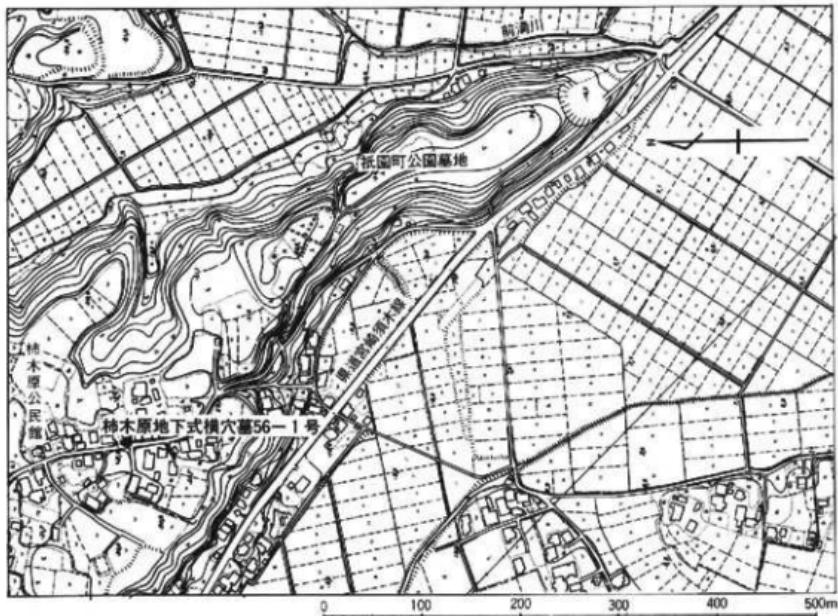
## 2. 遺跡の立地と環境

地下式横穴墓が発見された柿木原地区は、宮崎市の北西部、大淀川とその支流である本庄川の左岸区域に位置し、隣接する東諸県郡国富町、宮崎郡佐土原町に続いて広がっている山地から大淀川に向かって突き出している幾つかの舌状台地の先端に形成された集落である。この台地は、黒色の火山灰質土壤に覆われており、柿木原台地のほか岩知野下・上野・野首・吉野・有田などではシラスの堆積が散見される。標高は約30m前後でそれほど高くはないが、いわゆる隆起洪積台地であるため、平野部との境をなす周辺部は急斜面を呈している。

周辺の歴史的な環境を眺望してみると、舌状台地の基幹部、標高約120mに立地する垂水公園遺跡からナイフ形石器（先土器時代）が発見されたのをはじめとして、多くの遺跡が存在している。柏田の直純寺の丘陵には縄文時代前期の柏田貝塚があり、大淀川を挟んで対岸には跡江貝塚が、大淀川をもう少しあかのぼったところに花見貝塚（東諸県郡高岡町）が見られる。それらの宮崎市北西部の丘陵地に立地する縄文時代早期から前期の貝塚遺跡のありようは、海進現象により、当時の海岸線がかなり内陸にあったことを示している。弥生時代になると逆に海岸線が後退し、ほぼ現在と同じような平野部ができ上がっていたことが知られているが、上

北方、瓜生野（上野）、大瀬村（平松）などから土器片が出土しており、柏田直純寺裏北側では、昭和28年に製銅遺跡が発見され、石川恒太郎氏によって弥生時代のものと報告されている。古墳時代では、昭和19年に県指定古墳となった瓜生野古墳群がある。この古墳群は地域別に上北方地区を中心とする横穴墓群、竹篠台地の分布していた高塚群、柿木原地区に分布する高塚と地下式横穴墓群とに大別できる。この古墳群の特徴としては、上北方を中心として横穴墓が数多く群集する（約90基）ことであり、また今回調査した56-1号墓をはじめとして、地下式横穴墓が柿木原台地に多く見られることも、宮崎の古墳文化の一つのありようを示すものとして興味深いものがある。

奈良時代になると、「日向の国」は臼杵・児湯・宮崎・那珂・諸県の5郡となった（和銅6年・713）が、現在の大瀬町、瓜生野一帯は諸県郡に属し、瓜野（うりうの）郷と称した。その後、この地には、宇佐八幡の荘園がおかれ（瓜生野別府）、平安時代、鎌倉時代と領地を拡大していった。建久8年（1197）の「日向國団田帳」（建久団田帳）には、「瓜生野別府百町…」とある。鎌倉時代には、八正山金剛寺（大字大瀬町平松）が創建され（伝・建武3年・1336）奈良時代に創建されたと伝えられる竹篠山王樂寺にまつられている薬師三尊像は、鎌倉時代初期に中央の仏師によって彫られたとされ、宮崎県内でも最古の仏像であり、瓜生野周辺一帯が早い時期から宗教的（文化的）に高い地位を確立していたことが知られる。



第1図 柿木原地下式横穴墓56-1号 発掘調査地点とその周辺

南北朝時代以降になると、この一帯は隣接する倉岡、下北方を含めて、戦略的、経済的な要衝の地として、上持、伊東、島津各氏の争奪の地となり、繰り返し戦いが行われ、統治者も代わったが、天文15年（1587）豊臣秀吉の天下統一の後は、日向国は小藩に分けられ、瓜生野は延岡領となり、江戸時代にもこれが継続され、明治4年（1871）の廢藩置県まで続いていた。



第2図 柿木原地下式横穴墓56-1号周辺地形図

参考文献 瓜生野・倉岡郷土誌		昭和61年3月発行
日向地誌（復刻版）	平部 岳南 著	昭和51年11月発行
宮崎市史・続編（上）		昭和53年3月発行
日向の横穴	曾我部 長良 著	昭和50年10月発行
「日向国図帳」	日向郷土史料集 第5巻	昭和38年6月発行

## II 調査の概要

柿木原地下式横穴56-1号は、市道柿木原-岩知野線道路下において、水道工事に伴う掘削作業中、突然玄室天井部の一部が陥没して発見されたものであった。

陥没孔は、東西に長軸を持つ、角丸長方形を成す玄室の西南隅にあたっている。玄室内部は空洞状となり、北東方向に頭位をもつ保存状態の良好な人骨が残存することが確認されたため発掘調査は、陥没孔を拡張する形での着手となった。

なお、良好な状態での人骨が存在することから、まず、人骨の計測、取り上げを行った後に、全体的な発掘調査を実施することとなった。

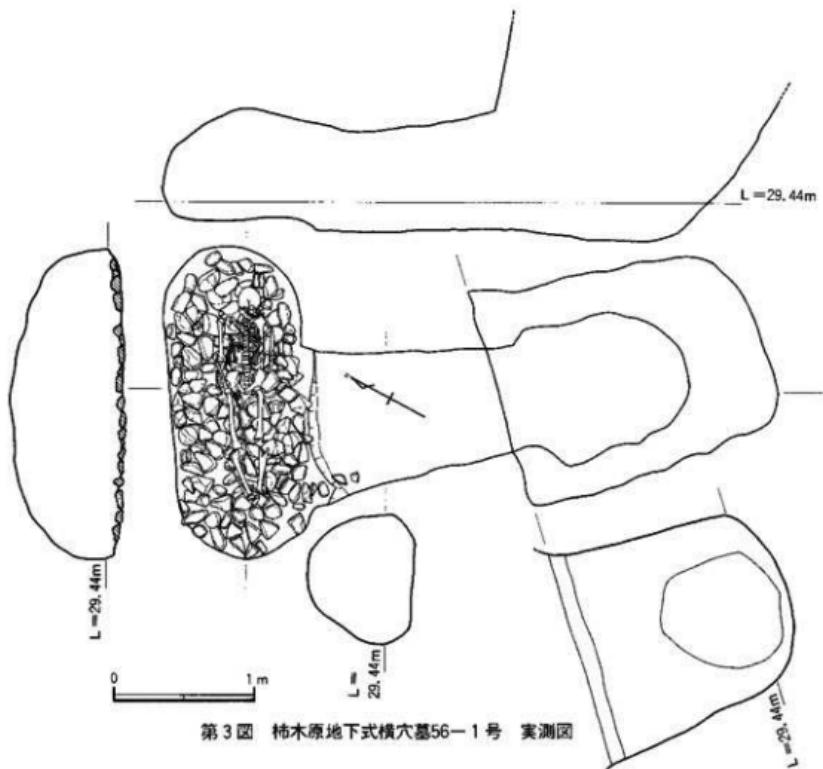
人骨の調査、取り上げについては、長崎大学医学部解剖学第二教室に応援協力を依頼し、昭和56年9月16日に同大学の松下孝幸助手（現助教授）、分部哲秋先生により作業が進められ、1Hでは終了した。

2日目からは、構造の発掘調査に入り、玄室内部の精査、その後狭道方向から堅壙部の検出を行い、堅壙の発掘の後、構造の実測図作成等を行い、5時間で発掘調査を終了した。

### III 遺構と遺物

#### 1. 遺構の構造

この地下式横穴は、玄室西南部隅の陥没孔を除いて、完全な状態で構築当時の構造を残したものであった。



第3図 柿木原地下式横穴墓56-1号 実測図

主軸方位はN-28°-Wを示し、南側堅壠を持ち、北側に、平入りタイプとなる玄室を持つ。堅壠は、掘り口上部が大きく、1辺1.6m×1.9mのやや変形した長方形形状を成し、下部（底部）においては1m×1.2mの半椭円形状にすばまり、断面では逆台形状を成し、深さは1.6m以上を示す。

羨道は入り口幅0.75m、奥部幅1.15m、長さ1.6mの奥広がりの長方形形状の床面を持つ0.75m内外の高さを持つアーチ形を成す。

玄室は、平入りタイプで短軸0.95m、長軸2.25mの長椭円形状を呈し、床面は羨道部より一段上がるベッド状の造り出しを行い、さらに径10cm内外の河原石を敷き詰めた疊床を造っている。天井は80cmと低く、全体的にゆるやかなアーチ状を成し、横穴墓及び地下式横穴に一般的に用いられる玄室の家型構造は失われ、ドーム状の傾向が見受けられる。

また、内部壁には幅16cmと身幅の広い鈍角を成す刃先を持つ工具による掘り跡が残されている。

玄室奥壁には東から西方向に入れられた痕跡、東壁はやや西南方向から、西壁は南東方向からの痕跡が顕著に残されている。

## 2. 地下式横穴の構築土層

地下式横穴の上部、上面は市道が走っており、現在は舗装されて、かなりの厚さの搅乱土層となっている。

舗装道下に、黒褐色粘質土層（小白斑ローム）が入り、その下部に褐色粘質土層（褐色ローム）がかなりの厚さで堆積しており、この層が地下式横穴の構築された土層であり粘質を持つローム層であることから、空間を持つ構造を保ちえたものと思われる。地下式横穴床面は、黄色シラス層の上面となっており、ローム層下に浸透性のあるシラス層が入ることから、排水等も考慮した構築が成されたものと思われる。

## 3. 遺物

男性人骨1体が極めて良好な状態で残存しており、出土遺物等についても期待が持たれたが、人骨の右大腿骨骨頭部に差し掛けられたような状態で鉄製刀子1本が出土しただけであった。

刀子は木質の柄が付けられており、木質部の断面は丸い。全長16.5cmを計り、柄部は径1.6cmの円形の断面を成し、長さ約10cmの木質部を残す。

刃部は銹着が進んでいるが身長6.5cm、身幅は中央部で1.3cm、棟幅0.4cmを計る。



第4図 刀子実測図

## V 結 語

柿木原地下式横穴墓56-1号の発見された昭和56年7月は、市街地の南西部に生目台町地の宅地造成が計画され、それらに伴う内野々遺跡の発掘調査を、宮崎市教育委員会が実施しているときであった。

発見当時から、埋葬人骨の残存が知られていたため、早急な発掘調査が必要とされたが、とりあえず陥没孔をアスファルトによって密閉する形で閉塞し、9月16日からの発掘調査に備えた。

### 【宮崎平野周辺における地下式横穴の分布】

#### 〈下北方台地〉

これまでに地下式横穴の分布は、大淀川に沿う市街地北部に下北方台地が伸びておらず、この台地には前方後円墳や円墳を含む県指定の古墳群が分布することが知られており、特に台地の南端にあたる塚原地区には、高塚の分布に混じて、地下式横穴の分布することが確認されている。この塚原地区においては過去9基の地下式横穴が発見されているが、本格的な発掘調査によって発見されたのは、昭和44年、県指定古墳7号墳の封土下に玄室を持つ4号地下式横穴からであり、昭和4年に1号が発見され、それ以降2号、3号が確認されているものの、記録は残されていない。5号地下式横穴は、昭和50年に4号地下式横穴と同じく高塚7号墳の封土下に玄室を持って発見、発掘調査が行われ金製垂飾付耳飾をはじめとする装身具、武具、馬具、農耕具等の多量の副葬品が出土したことでも知られている。

6号～9号は、昭和57年の発掘調査によって発見されたものであり、6号と8号は、全体の発掘調査が行われているものの、7号と9号は、それぞれ県指定8号墳、7号墳の封土下に玄室を持つことから竖墳のみの調査に終わっており、玄室の内容については不明である。

下北方台地式横穴の特徴としては、プランが8号地下式横穴を除いて妻入りタイプが大勢を占めるとともに、副葬品の多様さがあげられる。また、高塚の封土下に玄室を持つものが多く高塚と地下式横穴のありようについて、問題提起を行っていることに特徴が受けられる。

#### 〈柿木原台地〉

柿木原台地は、下北方台地の西側に南北に入り込む上北方低地、そして竹篠台地が突出し、また大瀬町低地の入り込みを挟んで柿木原・岩知野台地の突き出しが見受けられ、この台地の先端延長部では大淀川と本庄川の分岐点にもあたる。

從来、この柿木原台地には県指定瓜生野古墳群の分布が知られているが、地下式横穴の分布は確認されていなかった。しかし、柿木原地下式横穴墓56-1号の発見により、地元の人々からの聞き取りによって、56-1号を中心周囲に少なくとも3基の地下式横穴が分布することが確認された。いずれも陥没による発見であった。56-1号の東側約50m離れた畑地での陥没した地下式横穴からは、壺が出たとの話であった。また、56-1号から西に入り込む道路においても陥没があり、中は空洞であったとのことで、これらは直ちに埋め戻されたとのことであり、発掘調査時にその個所を確認したところ、陥没孔の跡をはっきり確認することができた。今後も地下式横穴の発見される可能性の強いところである。

### 〈木脇塚原台地〉

柿木原・岩知野台地の西南、県道宮崎・須木線を挟んで、本庄川の左岸に独立丘陵として塚原台地が立地する。

昭和44年、住宅団地造成中に2基の地下式横穴が発見され、遺物として三角板革綴短甲、長方板革綴衝角付冑他、武具、鋤先等が発見され、甲冑の組み合せ等から5世紀代でも早い時期の構築が想定される。興味深い地下式横穴である。

以上、宮崎市北西部における、大淀川左岸に突き出す丘陵上における、地下式横穴の分布を概観してきたが、木脇塚原地下式横穴は、大淀川から分岐する本庄川の左岸地域に属し、この左岸に沿って、国富町、綾町の台地が連なっており、地下式横穴が多く分布する地域となる。

### 【柿木原地下式横穴墓56-1号の位置付け】

柿木原地下式横穴墓56-1号は、人骨の所見の特異性もさることながら、種々の問題を提起しているように思われる。以下、それらについて概観してみたい。

海岸線沿いに分布する地下式横穴で、西都原を中心とする一群、下北方台地を中心とする一群、やや内陸に入る六ツ野原を中心とする一群があり、それらの群中にはそれぞれ西都原地下式横穴1号、下北方地下式横穴5号、六ツ野原地下式10号といった、高塚の封土下に玄室を持ち、プランも妻入り長方形状の大型の構造を持ち、各種多量の副葬品を持った代表的な地下式横穴が見受けられる。

これらの横穴は、他の地下式横穴に先行する形を取るとともに、後続する地下式横穴に何らかの影響を及ぼしていたように思われる。特に、こうした一群の中には、妻入りタイプ構造を持つ地下式横穴が多く、平入りタイプの横穴が比較的少ないと窺われる。

先行する地下式横穴は構造上もしっかりした規律性を持った構築が行われているが、後続するものは、妻入り、平入りタイプといった基本型は残されているものの、徐々にその規律性を失いつつある。

柿木原地下式横穴墓56-1号は、比較的大型の堅壠を持ち、羨道は他の例に比して非常に長く、玄室は角丸長方形状をした特異性を持っている。こうした類例は、平入りタイプでは見受けられないが、妻入りタイプになると、国富町宗仙寺9号、10号地下式横穴に楔形を成す三角形状の玄室を持つものが見受けられ、同様の特異性を持つ。

また、玄室床面は羨道からの床面に対して一段高くなり、全面に川原石を敷き詰めた礫床を造り出しておらず、こうした礫床の顕著なものとしては、下北方地下式横穴5号があり、礫床をもつ地下式横穴は、前述した海岸線沿いに分布する地下式横穴群に見受けられ、内陸部に分布する地下式横穴には見受けられない。このことは、これらの地下式横穴が、湿気と粘質を持ったローム層を穿って玄室を設けているため、埋葬施設としての役割のはかに湿気、排水に対する構えも一因と考えられよう。

なお、副葬品が刀子1点のみと、他の地下式横穴に比して非常に少ないことも注目される。

以上のことから柿木原地下式横穴墓56-1号は、構造上の規律性は失いつつも、羨道の長さ、玄室の礫床等にその特徴を残すこと、また、国富町宗仙寺地下式横穴9号、10号は、鋤先等を

出土しており、その形態から 6 世紀後葉に比定されていることもあり、本地下式横穴はそれらに後継するものと思われ、6 世紀の末葉時期に比定されるであろう。

#### 参考文献

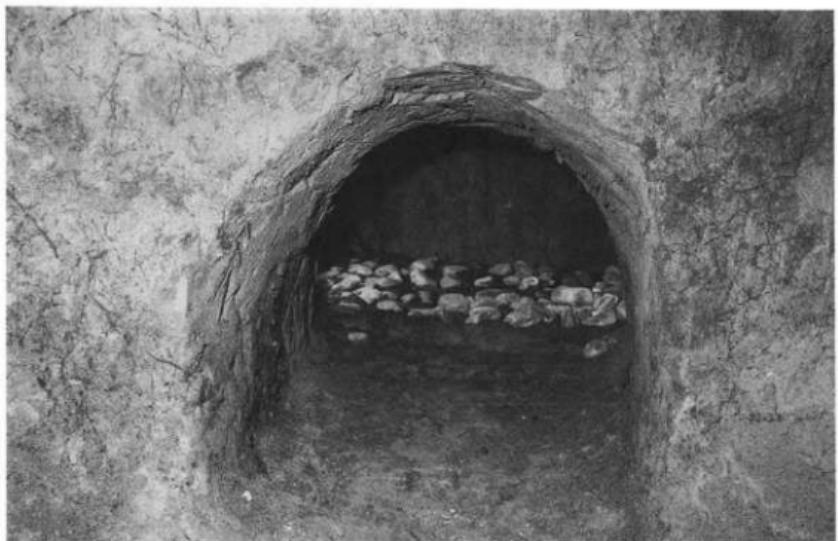
- 「地下式横穴墓から見た古墳時代」資料 宮崎県考古学会・鹿児島県考古学会 1986  
「下北方地下式横穴第 5 号緊急発掘調査報告書」宮崎市教育委員会 1977  
「国富町文化財調査資料」第 1 集 国富町教育委員会 1980



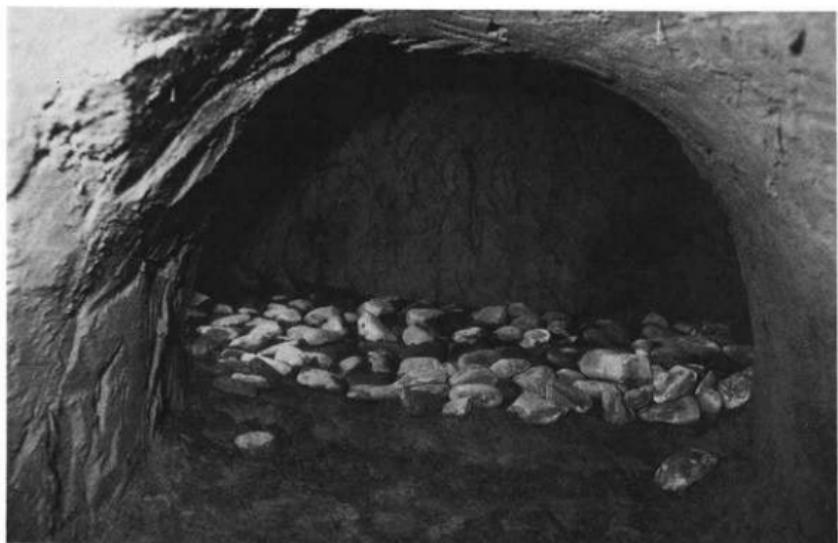
図版1 柿木原地下式横穴墓56-1号発掘調査地点（調査終了後・北から）



図版2 柿木原地下式横穴墓56-1号壁壙・羨道入口



図版3 焗道入口から奥壁をのぞむ



図版4 玄室入口から



図版5 玄室内部（南西から）



図版6 玄室内部（頭部付近）



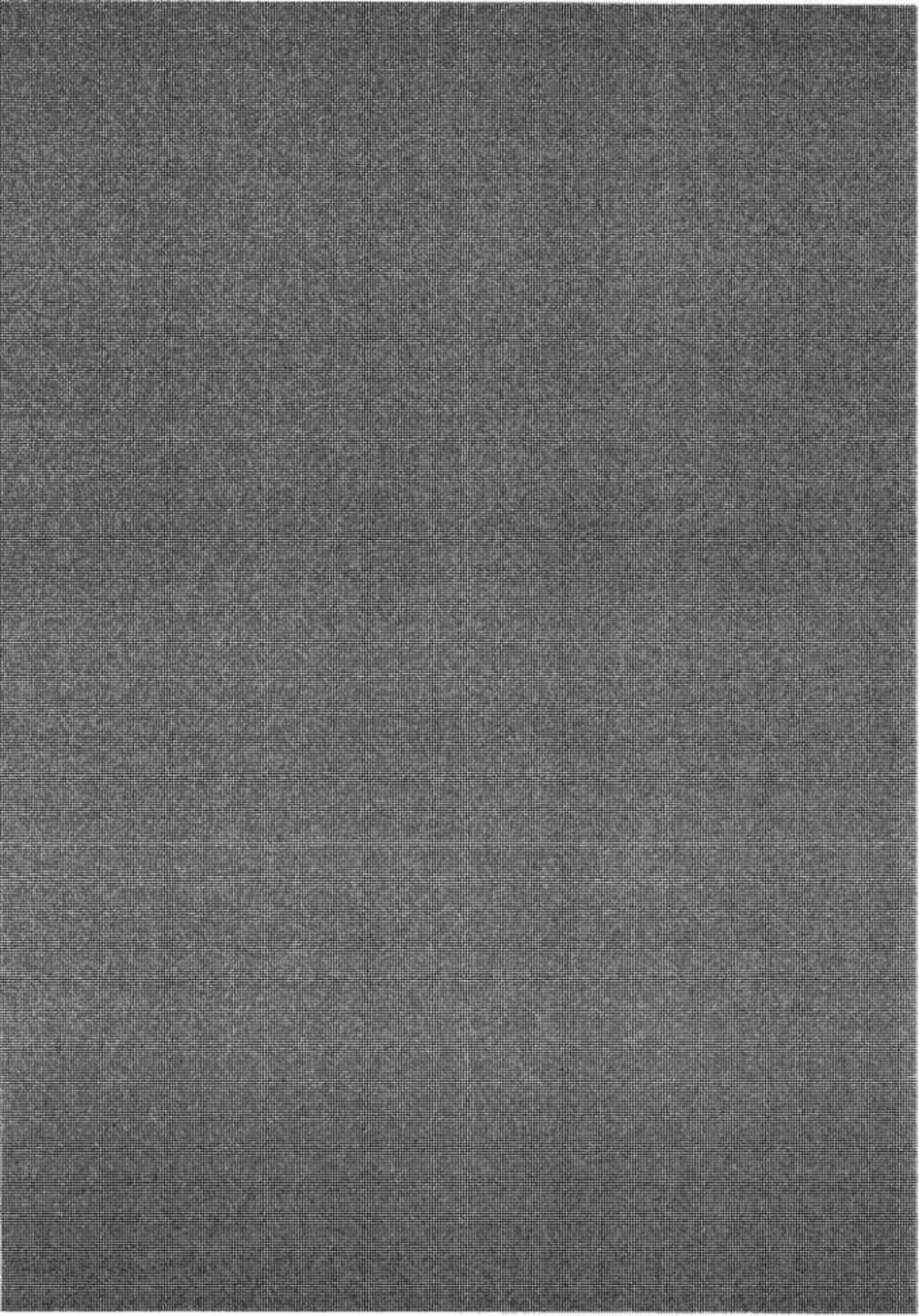
図版7 尸床および埋葬人骨の状況



図版8 刀子の出土状況（矢印）および刀子

# 宮崎市柿木原地下式横穴墓 出土の古墳時代人骨

松下孝幸・分部哲秋



## 本文目次

はじめに .....	13
資料 .....	13
所見 .....	15
考察 .....	17
要約 .....	23

## 挿図目次

図1 遺跡の位置 .....	14
図2 人骨の残存部、アミかけ部分 .....	16
図3 主座標分析 .....	20

## 図版目次

図版1 柿木原56-1号人骨(男性、熟年)(1) .....	29
図版2 柿木原56-1号人骨(男性、熟年)(2) .....	30

## 表 目 次

表1	推定身長値	17
表2	脳頭蓋計測値	18
表3	顔面頭蓋計測値	19
表4	鼻根部計測値	20
表5	上腕骨計測値	21
表6	大腿骨計測値	21
表7	脛骨計測値	22
表8	推定身長値	23
表9	腹頭蓋計測値	24
表10	顔面頭蓋計測値	24
表11	鼻根部計測値	25
表12	下顎骨計測値	25
表13	鎖骨計測値	25
表14	肩甲骨計測値	25
表15	上腕骨計測値	25
表16	橈骨計測値	26
表17	尺骨計測値	26
表18	大腿骨計測値	26
表19	脛骨計測値	26
表20	腓骨計測値	26
表21	推定身長値	26

## はじめに

宮崎市大字大瀬町に所在する柿木原（かきのきばる）地下式横穴墓群の中の1基（56-1号墳）が、昭和56年（1981年）9月に水道工事に伴って発見され、宮崎市教育委員会によって、発掘調査が行なわれた結果、保存良好な人骨が出土した。

宮崎県では以前からかなりの数の古墳時代人骨、それも地下式横穴墓からの人骨が出土している。高塚式の古墳とは異なり、その構造上の特徴が幸いして盗掘から免れたこともあり、保存状態やその出土量は他県より優っている。

長崎大学医学部解剖学第二教室では、日本人の起源とその形質変化を明らかにするため、西日本各地から出土する古人骨の収集を行なうとともに、人類学的研究を続けている。古代では、南九州の人々は「隼人」、「熊襲」と呼称されており、九州における形質人類学上の課題の1つはこの「隼人」、「熊襲」とよばれた人々の形質的特徴を明らかにし、その起源を探るとともに、当時の日本における位置付けを行なうことである。このような研究にとって、宮崎県の古墳時代人骨はきわめて貴重な資料となるものである。

当教室では約5年間にわたって、このような研究を続けてきた結果、宮崎県の古墳時代人の特徴が次第に明らかになってきたが、この間の資料は主に西諸県郡を中心とする山間部の古墳時代人骨であった。ところがこの柿木原地下式横穴墓から出土した古墳時代人骨は一見して、従来の宮崎県の古墳時代人骨とは明らかに異なる特徴を示していた。その後、国富町の本庄28号墳および市ノ瀬地下式横穴墓群、宮崎市の跡江横穴から出土した人骨などの特徴から、宮崎県の古墳人には地域差が存在することが次第に明確になってきたのである。すなわち、その差とは宮崎市を中心とする半野部と西諸県郡などの山間部との差である。このような地域差の存在を初めて示唆した本人骨は、今後の南九州地域の古墳時代人の研究にとってきわめて貴重であり、今後の研究のために、本人骨の特徴などを報告しておきたい。

## 資 料

昭和56年（1981年）に発見された横穴墓は「56-1号墳」と番号がつけられた。残存している人骨は1体分の人骨で、熟年の男性骨であった。

この人骨は、別稿で述べられているように、考古学的所見より古墳時代後期に属する人骨である。

計測方法は、Martin-Saller (1957) によったが、一部はHowells (1973) の方法で計測した。また脛骨の横径はオリビエの方法で計測し、鼻根部については鈴木 (1963) と松下 (1983 b) の方法で計測した。

今回比較に用いたのは、同じ宮崎県の灰塚（内藤、1973）、日守（松下、1981）、上の原（松

\* Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE

Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University

[長崎大学医学部解剖学第二教室（主任：内藤芳篤教授）]

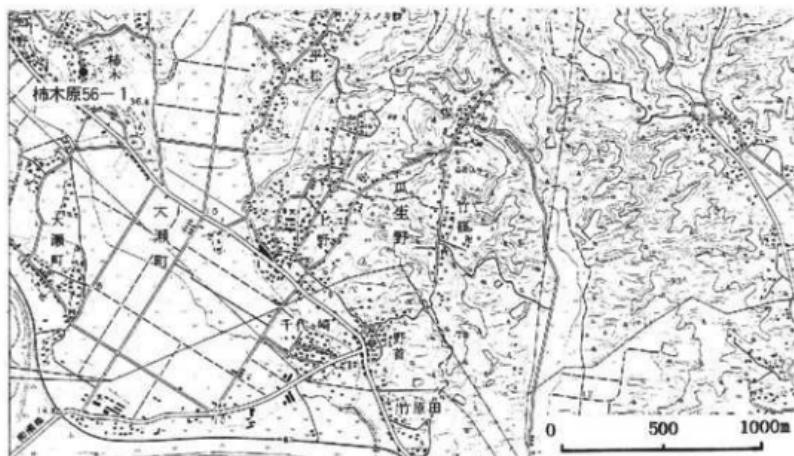
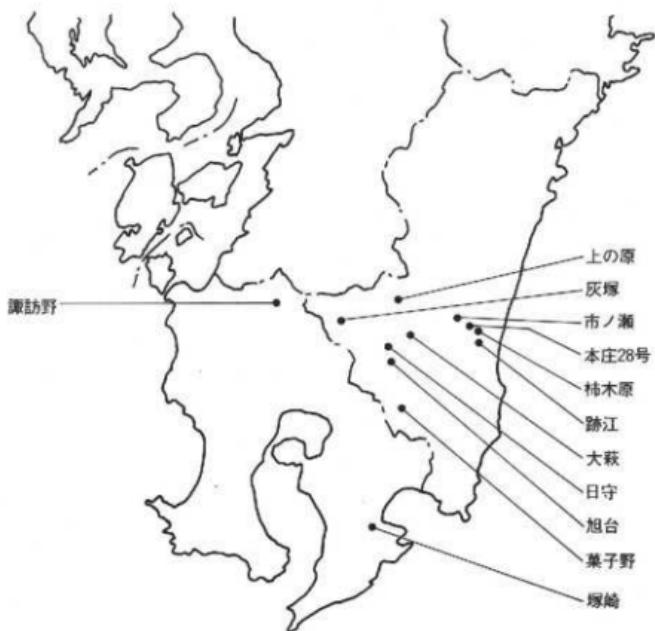


図1 遺跡の位置 ( Fig. 1. Location of Kakinokibaru site, Miyazaki Prefecture )

下、1981)、本庄28号(松下・他、1982)、旭台(松下・他、1983)、菫子野(松下・他、1983)、大荻(松下、1984)、跡江(松下、1984)および鹿児島県の諏訪野(松下、1984)、岡崎(松下・他、1986)の各横穴墓群から出土した古墳人を用いた。

## 所 見

各人骨の残存部は図2に示すとおりである。また、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

### 1. 頭蓋

#### (1) 脳頭蓋

後頭骨後頭鱗の一部と左側の頭頂骨の一部を欠損している。外後頭隆起の発達はやや良好で、乳様突起も大きい。外耳道は右側の観察が可能で、後壁には弱い骨膚が認められる。縫合は、三主縫合のうち冠状縫合と矢状縫合の内板は癒合閉鎖しているが、外板は大部分が開離している。ラムダ縫合は内外両板とも開離していたようである。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が171mm、頭蓋最大幅は(130mm)、バジオン・ブレグマ高は129mmである。頭蓋長幅示数は(76.02)、頭蓋長高示数は75.44、頭蓋幅高示数は(99.23)となり、頭型はmeso-, hypsi-, akrokran(中、高、尖頭)に属している。また頭蓋水平周囲は499mmで、脳頭蓋の全体の径は小さい。

#### (2) 顔面頭蓋

前頭骨の左側の眼窩部、両側の頬骨の大部分を欠損しているが、頭蓋の特徴を把握することは可能である。眉上弓の隆起は強い。鼻骨は狭く、鼻根部はそれほど扁平ではなく、といって隆起が強いものでもない。

顔面頭蓋の計測値は、顎長が102mm、顎高は124mm、上顎高は72mmで、顎の高径はかなり高い。一方、頬骨弓幅、中顎幅は計測できないが、右側頭骨の頬骨突起が残存しているので、右側半を使って、頬骨弓幅の推定値を算出してみると、[67mm×2=134mm]となり、この推定値を用いて示数値を算出すると、顎示数は[92.54](K)、上顎示数は[53.73](K)となり、顎面には狹・高顎傾向が認められる。

眼窓幅は45mm(右)、眼窓高は33mm(右)で、眼窓示数は73.33(右)となり、右側はchamaekonch(低眼窓)に属している。

鼻幅は28mm、鼻高は52mmで、鼻示数は53.85となり、chamaerrhin(低鼻)に属している。鼻根部の計測値は、前眼窓間幅が17mm、鼻根横弧長は24mm、鼻根弯曲示数は80.95である。前頭突起水平傾斜角は80度を示し、前頭突起は矢状方向である。

側面角は、全側面角が82度、鼻側面角が85度、歯槽側面角は76度で、歯槽性突顎の傾向はほとんど認められない。

下顎骨は大きくて、頑丈である。下頸枝は幅広く、下顎切痕は浅い。

### 2. 齒

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

M <sub>3</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	C	I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>		I <sub>1</sub>	I <sub>2</sub>	C	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>
M <sub>3</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	C	I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>		I <sub>1</sub>	I <sub>2</sub>	C	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>

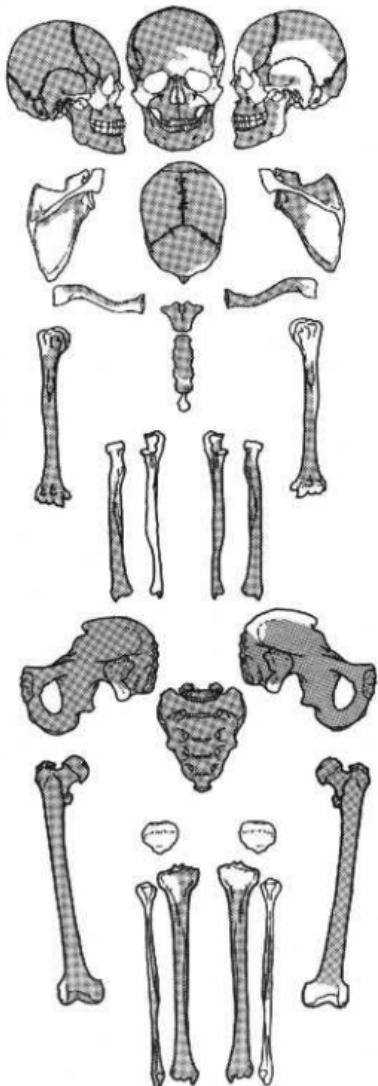


図2 人骨の残存部、アミかけ部分  
(Fig. 2. Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)

咬耗度は Broca の 3 度である。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。また、歯の咬合形式は鉗子状咬合である。

### 3. 四肢骨

#### (1) 上肢骨

肩甲骨、鎖骨、上腕骨、桡骨および尺骨が残存していた。

##### ① 鎖骨

両側が残存していた。長さはあまり長くはないようであるが、径はやや太い。

##### ② 上腕骨

両側とも残存していたが、右側の方が保存状態は良好で、計測ができたのは右側のみである。長さは長く、三角筋粗面の発達は悪く、骨体は細い。

計測値は最大長が (314mm) (右)、骨体最小周は58mm (右)、中央周は59mm (右)、68mm (左) で、長厚示数は (18.47) (右) である。また、中央最大径は18mm (右)、中央最小径は15mm (右) で、骨体断面示数は83.33 (右) となり、骨体には扁平性は認められない。

##### ③ 桡骨

左右とも近位端を欠損している。長さはやや長く、骨体は細い。

##### ④ 尺骨

左側のみが残存していた。長さはやや長く、骨体は細い。

#### (2) 下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨および腓骨が残存していた。

##### ① 審骨

左右ともほぼ完全である。大坐骨切痕の角度は小さく、恥骨下角も鋭角である。

## ② 大腿骨

右側はほぼ完全であるが、左側は遠位部を欠損している。長さは長く、粗線の発達は悪く、骨体両側面は後方へは発達していない。

計測値は、最大長が448mm(右)、骨体中央矢周は89mm(右)、86mm(左)で、長厚示数は19.96(右)である。骨体中央矢状径は28mm(右)、25mm(左)、横径は28mm(右)、27mm(左)で、骨体中央断面示数は100.00(右)、92.59(左)となり、粗線や骨体両面の後方への発達はきわめて悪い。また、上骨体断面示数は83.87(右)、70.00(左)となり、左側の骨体上部は扁平である。

## ③ 脛骨

右側はほぼ完全であるが、左側は近位部を欠損している。長さは長いが、骨体の太さは古墳人としては普通である。ヒラメ筋線の様態は不明である。骨体の断面形は右側はヘリチカのV型を、左側はII型を呈している。

計測値は、脛骨最大長が371mm(右)、骨体周は80mm(右)、79mm(左)、最小周は76mm(右)、70mm(左)である。中央最大径は30mm(右、左)、中央横径は19mm(右、左)で、中央断面示数は63.33(右、左)となり、骨体は古墳人としてはかなり扁平である。

## ④ 肋骨

両側とも残存していたが、保存状態が良いのは右側の方である。骨体はやや大きく、扁平である。

## 4. 推定身長値

上腕骨、大腿骨、脛骨のそれぞれ最大長から、Pearsonおよび藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、表1のとおり、いずれの場合も160cmを越え、特に、大腿骨からの推定値は165.53cm(Pearsonの式)となり、高身長である。

表1 推定身長値(cm)(Table1. Estimated statures)

	Pearsonの式	藤井の式
上腕骨(右)	(161.51)	(160.85)
大腿骨(右)	165.53	165.56
脛骨(右)	166.81	165.64

## 5. 性別・年令

性別は、外後頭隆起や肩上弓が良く発達しており、大坐骨切痕の角度や恥骨下角が小さいことから、男性と推定した。年令は、冠状縫合と矢状縫合の内板が融合閉鎖していることから老年と考えられる。

## 考 察

本人骨を含めた南九州地域での古墳時代人骨に関する検討や考察は、現在進行中で、近いうちにその結果を報告する予定であるので、本稿では主に宮崎県内の検討を若干行なっておきたい。

## 1. 頭蓋

まず、頭型であるが、表2に示しているように、本例はわずかに長頭に傾いた中頭型に属している。南九州地域の古墳人の頭型に関しては、以前から指摘しているように、宮崎市周辺で強い短頭性が認められ（跡江、市ノ瀬）、宮崎市から次第に遠ざかるにしたがってその短頭性は弱くなり（大萩、旭台）、県境か鹿児島県に入ると長頭に傾く（菴子野、諏訪野）傾向が認められ、大隅半島に入ると再び強い短頭性が認められるようになる（岡崎）。本例の頭蓋長幅示数は(76.02)で、頭型は中頭型に属しており、宮崎市の古墳人としてはきわめて特異的である。

表2 脳頭蓋計測値(男性、mm)(Table 2. Comparison of male calvarial measurements and indices)

1. 頭蓋最大長 古墳人 (松下)	松木原		古ノ瀬		跡江		菴子野		諏訪野		日守		大萩		旭台		岡崎	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1. 頭蓋最大長	1	171	1	178	1	(170)	3	182.33	1	185	5	183.29	—	—	—	—	—	—
8. 頭蓋最大幅	1	(130)	1	143	1	150	3	136.33	—	—	5	144.80	3	143.33	1	153		
17. パリオン・ブングマ高	1	129	2	139.50	1	140	3	135.67	1	137	1	146	6	134.50	3	136.00	1	133
8/1頭蓋長幅示数	1	(76.02)	1	80.34	1	(86.24)	3	74.79	—	—	1	80.56						
17/10頭蓋長高示数	1	75.44	1	77.53	1	(82.35)	3	74.43	—	—	1	78.97	4	72.55	—	—		
17/10頭蓋長幅高示数	1	(99.23)	1	96.50	1	93.33	3	99.51			3	95.82	1	89.93	1	86.93		
頭蓋モルス	1	(143.33)	1	153.00	1	(153.33)	3	151.45	—	—	1	153.67	—	—				
23. 頭蓋水平幅	1	499	1	517	1	(515)	3	151.00	—	—	1	523	—	—				
24. 横張長	—	—	1	319	1	326	2	303.00	—	—	2	310.50	2	312.00	1	319		
25. 正中矢状弧長	—	—	—	—	2	375.00	—	—	1	380	2	368.50						

次いで、顔面頭蓋を検討してみたい。表3に示しているように、頬骨弓幅は(134mm)で、今回比較に用いた資料の中では最も小さく、顔の幅はかなり狭い。一方、顔高は124mm、上顎高も72mmと、顔面の高径はかなり高く、前者はいずれの比較資料よりも大きく、後者は「菴子野」、「諏訪野」、「日守」、「大萩」、「旭台」、「灰塚」および「上の原」の各山間部の古墳人よりも大きく、本庄28号墳人骨の値に一致する。従って、顔示数と上顎示数はいずれの資料よりも大きくなり、本古墳人には「狹・高顔」傾向が認められる。

しかし、眼窩幅は45mmとやや広く、この値は表3では、日守古墳人に次いで広く、眼窓高は33mmで、高さは低い。従って眼窓示数は73.33となり、この示数值はかなり小さく、日守古墳人や灰塚古墳人の値に近く、眼窓の形態は顔全体の形態とは異なり、低窓窓である。

また、鼻幅も28mmとかなり広く、この値は旭台古墳人に近い。鼻高は52mmで、これはけっして低い値ではないが、鼻幅がより広いので、鼻示数は53.85とやや大きな値となり、「市ノ瀬」、「跡江」、「本庄28号」の宮崎平野部の古墳人よりも大きく、山間部の古墳人の示数值に近い。

次いで、鼻根部を検討してみると、表4のとおり、鼻根部は狭く、鼻根横弧長はやや大きいので、鼻根弯曲示数は80.95となり、この示数はかなり小さく、旭台古墳人の平均値に近く、鼻根部は他の宮崎県の古墳人ほど扁平ではない。また、前頭突起水平傾斜角は80度で、跡江古

表3 顎面頭蓋計測値(男性、mm、度)(Table 3. Comparison of male facial measurements and indices)

	柿木原 占墳人 (松下・他)	市ノ瀬 占墳人 (松下・他)			江 古墳人 (松下・他)			本山28号 古墳人 (松下・他)			柴子野 古墳人 (松下・他)			深訪野 古墳人 (松下・他)			日守 古墳人 (松下・他)			大森 古墳人 (松下・他)			灰塚 古墳人 (内藤) (松下・他)								
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M				
40.	顎長	1	102	1	83	1	101	—	—	2	96.00	1	99	—	—	6	101.33	3	100.00	1	105	—	—	—	—	—	—				
41.	側顎長	1	72(G)	1	71	—	—	1	71	3	68.67	1	69	1	69	6	74.50	4	72.25	1	70	1	78	—	—	—	—	—	—		
45.	頸骨幅	1(134)	1	138	—	—	—	—	1	140	—	—	—	—	3	141.00	2	135.50	—	—	1	146	—	—	—	—	—	—			
46.	中顎幅	1	98	—	—	—	—	—	3	102.67	—	—	—	—	4	102.25	4	99.00	1	102	1	104	—	—	—	—	—	—			
47.	顎高	1	124	1	123	1	118	—	—	2	115.50	1	116	—	—	6	114.67	3	111.67	1	112	1	112	—	—	—	—	—	—		
48.	上顎高	1	72	1	66	1	71	1	72	2	64.00	1	66	1	66	8	64.38	5	65.00	1	61	2	65.50	—	—	—	—	—	—		
47/45	歯示数(K)	1	[92.54]	1	89.13	—	—	1	84.29	—	—	—	—	3	78.99	1	82.31	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
48/45	上顎示数(K)	1	[58.23]	1	47.83	—	—	1	45.71	—	—	—	—	3	43.97	1	48.46	—	—	1	46.58	—	—	—	—	—	—	—	—		
47/46	歯示数(V)	1	125.51	—	—	2	113.32	—	—	4	113.73	2	113.10	1	109.80	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
48/46	上顎示数(V)	—	—	1	67.55	—	—	2	62.85	—	—	4	63.39	2	64.84	1	59.88	1	65.38	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
	顎面モルタル 1(120)	1	114.67	—	—	1	117.00	—	—	2	115.34	1	110.67	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
50.	前窓骨幅	1	17	1	17	1	20	1	17	3	18.67	1	16	2	19.00	8	18.88	4	20.50	1	24	2	18.50	—	—	—	—	—	—		
44.	両脇窓幅	—	—	1	93	—	—	3	99.67	—	—	—	—	3	100.33	4	101.50	1	102	1	105	—	—	—	—	—	—	—	—		
50/44	眼窩鷲示数	—	—	1	18.28	—	—	3	18.73	—	—	—	—	3	19.60	3	19.09	1	23.53	1	19.05	—	—	—	—	—	—	—	—		
51.	頸窩鷲(左)	1	45(G)	1	40	—	—	1	44	3	42.67	1	43	1	46	6	42.33	3	43.67	1	43	1	44	—	—	—	—	—	—	—	—
52.	頸窩鷲(左)	1	33(右)	1	31	—	—	1	35	3	33.00	1	33	1	34	9	32.56	6	32.67	1	32	1	35	—	—	—	—	—	—	—	—
52/51	頸窩鷲(左)	1	73.33(G)	1	77.50	—	—	1	79.55	3	77.35	1	76.74	1	73.91	6	77.63	3	75.62	1	74.42	1	79.55	—	—	—	—	—	—	—	—
54.	鼻幅	1	28	1	24	1	27	1	25	3	27.00	1	26	1	31	9	26.78	7	28.71	1	27	2	27.50	—	—	—	—	—	—	—	—
55.	鼻高	1	52	1	48	1	58	1	53	3	48.33	1	50	1	55	9	50.89	6	48.50	1	42	2	52.00	—	—	—	—	—	—	—	—
54/55	鼻示数	1	53.85	1	50.00	1	46.55	1	47.17	3	55.84	1	52.00	1	56.36	8	53.05	6	59.16	1	62.29	2	52.89	—	—	—	—	—	—	—	—
72.	全額面角	1	82	1	89	1	82	1	78	2	82.00	1	81	1	88	8	84.63	3	76.67	1	84.5	1	86	—	—	—	—	—	—	—	—
73.	鼻側面角	1	85	1	96	1	86	1	83	3	85.67	1	82	1	92	9	88.44	3	78.00	1	93.5	1	85	—	—	—	—	—	—	—	—
74.	齒槽側面角	1	76	1	70	1	(58)	1	(61)	2	71.50	1	73	1	69	9	71.22	3	73.67	1	64	—	—	—	—	—	—	—	—		

墳人に次いで小さく、前頭突起の向きは矢状方向である。

歯槽側面角は76度で、この角度は表3の中では最も大きく、歯槽性の突顎傾向はほとんど認められない。

すなわち、本古墳人は中頭型で、著しい「狭・高顎」傾向を示し、歯槽性突顎が認められない古墳人で、山間部の古墳人とは異なる古墳人である。また、「市ノ瀬」、「跡江」、「本庄28号」の各古墳人も「狭・高顎」あるいは「高顎」傾向を示してはいるが、顎高と上顎高がともに高いわけではなく、両者にバラツキが存在するし、その他の形態的な特徴も考慮すると、柿木原古墳人はこの三者ともやや異質である。そこで、弥生人も含めて頭蓋11項目を用いてペンロー

表4 鼻根部計測値(男性、mm度) (Table 4. Comparison of male nasal root measurements and indices)

	柿木原		市ノ瀬		跡江		本庄28号		皇子野		源訪野		月日		守大		秋城		台灰塚	
	古墳人	古墳人																		
	(松下・他)	(内審)																		
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	
50. 前頭高開角	1	17	1	17	1	20	1	17	3	18.67	1	16	2	19.00	8	18.88	4	20.50	1	22
鼻根横弧長	1	21	1	19	1	23	1	19	3	22.67	1	18	2	22.50	8	22.38	2	24.00	1	24
鼻根聾曲示数	1	80.95	1	89.47	1	86.96	1	89.47	3	82.35	1	88.89	2	84.23	8	84.33	2	79.17	1	91.67
57. 鼻骨叢小輪	1	9	1	8	1	8	1	8	3	9.00	1	9	2	11.00	8	9.63	3	9.00	—	—
44. 四眼窓幅	—	—	1	93	—	—	—	—	3	99.67	—	—	—	—	3	100.33	4	101.30	1	97
50/44 眼窓間示数	—	—	1	18.28	—	—	—	—	3	18.73	—	—	—	—	3	19.60	3	19.09	1	22.68
前頭突起上輪(右)	1	9	1	10	1	11	1	9	3	9.33	1	10	2	10.50	6	11.00	3	11.00	1	12
(左)	—	—	1	12	1	10	1	8	3	8.67	1	10	1	10	8	10.38	2	10.50	1	11
前頭突起水平傾斜角	1	80	1	101	1	70	—	—	2	83.50	—	—	6	88.17	1	98	—	—	—	—

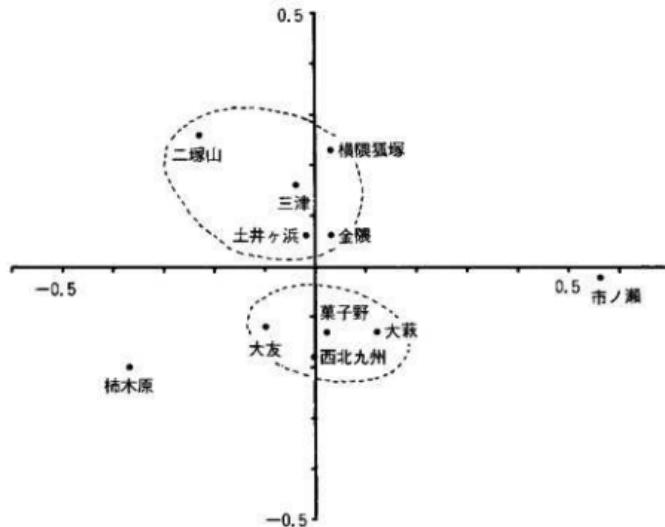


図3 主座標分析

(Fig. 3. Principal co-ordinates analysis of the Penrose's shape distances)

ズの形態距離を算出し、主座標分析を行なってみた。図3のとおり、大萩、菫子野、大友、西北九州弥生人が一群をなし、金隈、横隈、上井ヶ浜、三津、二塚山が別の一群を形成している。しかし、柿木原と市ノ瀬はこの両群からかなり離れたところに位置している。市ノ瀬古墳人の評価は別の機会に譲るとして、柿木原古墳人がかなり特異な古墳人であることがこれからもうかがえる。

## 2. 四肢骨

### ① 上腕骨

本上腕骨は長さが長く、最大長は(314mm)で、表5に掲げた資料のなかでは最も長い。最小周や中央周などの周径は小さく、特に中央周は表5では最も小さい。従って、長厚示数は(18.47)と、かなり小さくなり、やはり表5のなかでは最も小さな値で、上腕骨にはきしゃしゃな傾向が認められる。また、骨体断面示数は83.33となり、この示数は最も大きな値で、骨体には扁平性はまったく認められない。すなわち、本上腕骨は長さが長く、骨体が細く、扁平性が認められない上腕骨で、このような特徴を示す上腕骨は、宮崎県の山間部の古墳人はもちろん宮崎市周辺の古墳人のなかにも認められない。

表5 上腕骨計測値(男性、右、mm)(Table 5. Measurements and indices of male right humeri)

	柿木原 古墳人 (松下・他)		市ノ瀬 古墳人 (松下・他)		路江 古墳人 (松下)		菫子野 古墳人 (松下)		森野 古墳人 (松下・他)		大萩 古墳人 (松下)		柳台 古墳人 (松下)		上の原 古墳人 (松下)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	上腕骨最大長	1 (314)	1 292			1 292		—		1 291		—		—		—
2.	上腕骨全長	1 (310)	1 288		—	1 288		—		1 288		—		—		—
5.	中央最大径	1 18	2 23.00(左)	1 23	2 21.50	1 22	3 22.33	4 23.50	3 22.67							
6.	中央最小径	1 15	2 16.50(左)	1 16	2 16.50	1 15	3 16.67	4 17.50	3 17.67							
7.	骨体長細度	1 58	2 61.50	1 60	2 58.50	1 56	3 57.00	4 61.25	2 66.00							
7(a).	中火周	1 59	2 66.00(左)	1 65	2 63.50	1 62	3 65.33	4 66.75	3 67.33							
6/5	骨体断面示数	1 83.33	2 71.78	1 69.57	2 76.73	1 68.18	3 74.71	4 74.37	3 77.82							
7/1	長厚示数	1 (18.47)	1 20.89		1 20.89		—	1 20.27		—		—				

表6 大腿骨計測値(男性、右、mm)(Table 6. Measurements and indices of male right femora)

	柿木原 古墳人 (松下・他)		市ノ瀬 古墳人 (松下・他)		路江 古墳人 (松下)		菫子野 古墳人 (松下)		森野 古墳人 (松下)		日之出 古墳人 (松下)		大森 古墳人 (松下)		柳台 古墳人 (松下)		上の原 古墳人 (松下)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	最大長	1 448	1 449(左)	—	1 383	1 411	1 420	2 410.00	—									
2.	自然位全長	1 446	1 445(左)	—	—	—	1 414	2 407.50	—									
3.	最大軸子長	1 435	1 441(左)	—	—	—	1 407	—	—									
4.	自然位軸子長	1 435	1 427(左)	—	—	—	1 390	—	—									
6.	骨体中央矢状径	1 78	1 29.25	1 29	2 27.00	1 25	1 29	6 27.67	4 28.25	1 27	2 26.50							
7.	骨体中央横径	1 28	1 26.75	1 25	2 26.00	1 23	1 26	6 25.33	4 27.00	1 25	2 24.30							
8.	骨体中央高	1 89	1 85.67	1 86	2 85.00	1 78	1 88	6 83.33	4 87.75	1 84	2 80.30							
9.	骨体上端幅	1 31	1 31.50	1 27	2 39.50	1 27	1 31	2 30.50	2 31.00	—	1 28							
10.	骨体上矢状径	1 26	1 23.50	1 25	2 23.50	1 22	1 25	2 22.50	2 25.00	—	1 23							
8/2	長厚示数	1 19.96	1 20.90	—	—	—	1 21.76	2 20.62	—	—	—							
6/7	骨体中央断面示数	1 100.00	1 109.32	1 116.00	2 105.06	1 108.70	1 111.54	6 109.40	4 104.88	1 108.00	2 108.17							
10/9	上骨体断面示数	1 83.87	1 74.70	1 92.59	2 81.01	1 81.48	1 80.65	2 73.76	2 80.84	—	1 82.14							

## ② 大腿骨

表6は大腿骨計測値の比較表であるが、一見して、宮崎平野部の古墳人が山間部の古墳人に比較して長さがかなり長いことがわかる。本例は448mm、市ノ瀬古墳人は449mmであるが、土井ヶ浜弥生人の平均値が431.5mm、二塚山弥生人の平均値が441.29mmであることを考えれば、柿木原古墳人や市ノ瀬古墳人の大腿骨はかなり長いことがうかがえる。一方、骨体中央周は89mmで、計測値としては表6のなかでは最も大きいが、長さの割にはそれほど大きいものではなく、従って長厚示数は19.96となり、大腿骨は頑丈なものではない。骨体中央断面小数は100.00となり、宮崎県の古墳人のなかでは最も小さな値で、粗線や骨体両側面の発達は悪い。また、上骨体断面示数は83.87を示し、表6では跡江古墳人に次いで大きな値となり、骨体上部の扁平性は弱い。すなわち、大腿骨も宮崎県の他の古墳人とはかなり異なった特徴を示している。

## ③ 脛骨

脛骨の比較表は表7に示すとおりで、柿木原古墳人の最大長は371mmで、市ノ瀬古墳人の364.00mmよりも長い。土井ヶ浜弥生人が352.5mm、二塚山弥生人の最大長が358.60mmなので、柿木原古墳人はいうまでもないが、市ノ瀬古墳人の脛骨もかなり長く、大腿骨の場合と同じように宮崎平野部の古墳人の脛骨はかなり長いことがわかる。最小周は76mmで、他の比較資料よりも大きいが、中央周は80mmとなり、この計測値はそれほど大きいものではなく、市ノ瀬古墳人や旭台古墳よりも小さく、跡江古墳人や栗子野古墳人の平均値に近い。また、中央断面示数は63.33となり、示数値はいずれの比較資料よりも小さく、古墳人としては骨体はかなり扁平である。すなわち、本脛骨は長さが長く、骨体が扁平な脛骨であり、宮崎県の古墳人のなかでは特異的な脛骨である。

表7 脣骨計測値(男性、mm)(Table 7. Measurements and indices of male right tibiae)

	柿木原 古墳人 (松下・他)		市ノ瀬 古墳人 (松下・他)		跡江 古墳人 (松下)		栗子野 古墳人 (松下)		瀬戸野 古墳人 (松下)		大 草 古 墳 人 (松下・他)		赤 池 古 墳 人 (松下)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1. 骨格全長	—	2356.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1.a. 脱骨最大長	1	371	2	364.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1.b. 腹骨長	1	356	1	354	—	—	—	—	1	357	—	—	—	—
2. 脱骨開端幅	1	345	1	340	—	—	1	298	—	—	1340	—	—	—
3. 中央最大径	1	39	2	32.50	1	29	2	30.50	1	27	4	29.00	4	30.25
4.a. 宗費孔位最大径	1	34	1	35	1	33	2	34.00	—	—	3	32.00	3	33.00
5. 中央横径	1	19	2	22.00	1	21	2	21.00	1	18	4	20.25	4	22.50
6.a. 宗費孔位横径	1	24	1	21	1	22	2	21.00	—	—	3	22.23	3	24.00
7. 骨体層	1	80	2	88.00(左)	1	79	2	80.50	1	71	4	78.25	4	83.00
8.a. 宗費孔位周	1	94	1	94(左)	1	87	2	89.00	—	—	3	87.33	3	92.00
9. 小周	1	76	1	72	1	72	2	71.00	—	—	3	74.00	2	74.00
9/8 中央断面示数	1	63.33	2	67.56	1	72.41	2	68.93	1	66.67	4	69.94	1	74.95
9.a/8.a 宗費孔位断面示数	1	70.59	1	60.00	1	66.67	2	62.00	—	—	3	69.96	3	72.96
10.b/1 長厚示数	1	20.75	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

### 3. 推定身長値

柿木原古墳人の右側大腿骨最大長から Pearson の式を用いて、推定身長値を算出すると、165.53cmとなり、かなりの高身長である。表 8 に示しているように、宮崎平野部の市ノ瀬古墳人も高身長で、また跡江古墳人は推定身長値を算出することはできなかったが、残存部分から推定すれば、これも高身長であったことが予想される。平野部に反して山間部の古墳人は日守古墳人が160.27cmであることを除けばいずれも160cm以下の低身長である。周辺地域で、高身長を示す古墳人は大隈半島の串良町の岡崎古墳人であるが、その推定身長値は161.02cmで、宮崎平野部の古墳人の値には及ばない。すなわち、身長値からも本例はかなり特異な古墳人といえる。

表 8 推定身長値(男性、Pearson の式、cm) (Table 8. Estimated male statures)

柿木原 古墳人 (松下・他)	市ノ瀬 古墳人 (松下・他)		巣子野 古墳人 (松下・他)		東野 古墳人 (松下)		日守 古墳人 (松下)		大森 古墳人 (松下)		岡崎 古墳人 (松下・他)			
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M		
大腿骨	1	165.56	1	165.72(左)	1	153.31	1	158.57	1	160.27	2	158.39	1	161.02(左)

## 要 約

宮崎市大字大瀬町から地下式横穴墓 1 基 (56-1 号墳) が発見され、昭和56年 (1981年) 9月に発掘調査が行なわれた結果、保存良好な人骨が 1 体出土した。この人骨はこれまでに報告されてきた古墳人とは全く異なる特徴を示し、宮崎県の地下式横穴墓から出土する古墳人には地域差が認められることを初めて示唆した貴重な 1 体である。この人骨の人類学的観察や計測を行ない、次の結果を得た。

1. この地下式横穴墓から出土した人骨は 1 体の熟年男性骨である。
2. この人骨の所属時代は、古墳時代後期である。
3. 脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が 171mm、頭蓋最大幅は (130mm)、バジオン・ブレグマ高は 129mm で、頭蓋長幅示数は (76.02)、頭蓋長高示数は 75.44、頭蓋幅高示数は (99.23) となり、頭型は meso-, hypsi-, akrokran (中、高、尖頭) に属している。
4. 顔面頭蓋の計測値は、顔高が 124mm、上顎高は 72mm で、顔の高径はかなり高く、顎骨弓幅の推定値は [134mm] で、顔の幅は狭く、顎示数は [92.54(K)]、上顎示数は [53.73(K)] となり、顔面には「狭・高顎」傾向が認められる。
5. 眼窩幅は 45mm(右)、眼窓高は 33mm(右) で、眼窓示数は 73.33(右) となり、右側は chamaekonch (低眼窓) に属している。
6. 鼻幅は 28mm、鼻高は 52mm で、鼻示数は 53.85 となり、chamaerrhin (低鼻) に属している。
7. 鼻根部の計測値は、前眼窓間幅が 17mm、鼻根横弧長は 24mm、鼻根弯曲示数は 80.95 である。前頭突起水平傾斜角は 80 度を示し、前頭突起は矢状方向である。
8. 齒槽側面角は 76 度で、歯槽性突頸の傾向はほとんど認められない。
9. 四肢骨は長さが長く、その刺に骨体が細い。また、上腕骨には扁平性は認められず、大腿骨も粗線や骨体両側面の後方への発達も悪く、骨体上部の扁平性は弱いが、脛骨は扁平である。

10. 右側大腿骨最大長からの推定身長値は165.53cm(Pearsonの式)となり、かなり高身長である。
11. 以上のように、本古墳人は、中頭型に属し、顔面は「狭・高顎」で、かつ高身長という特徴が認められ、頭蓋も四肢骨も從来の宮崎県の山間部の古墳人とは異なり、宮崎県の古墳人としてはかなり特異的な古墳人である。筆者等は高塚古墳の被葬者と地下式横穴墓の被葬者との間には形質上の差が存在するかもしれないを推測しているが、高塚古墳出土人骨は本県では皆無で、それを検証することができない状況が続いている。しかし、同じ地下式横穴墓から出土した人骨間でも形質上の差が存在することが明確になりつつある。しかもそれは地理的な差として把握できるようである。宮崎平野部の資料がまだ絶対的に不足しているが、今後の資料の増加と空白地域での人骨の出土例が増加すれば、本県での分布状況がかなり明確になり、宮崎平野部の古墳人の出自に関するものと考えている。

《擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた宮崎市教育委員会文化振興課の諸先生方に感謝致します。》

表9 頭蓋計測値(mm)(Calvaria)

	柿木原 56-1 男性
1. 頭蓋最大長	171
8. 頭蓋最大幅	(130)
17. バジョン・ブレグマ高	129
8/1 頭蓋長幅示数	(76.02)
17/1 頭蓋長高示数	75.44
17/8 頭蓋幅高示数	(99.23)
頭蓋モズルス	(143.33)
5. 頭蓋底長	98
9. 最小前頭幅	—
10. 最大前頭幅	101
11. 阿耳幅	—
12. 最大後頭幅	—
13. 乳突幅	—
7. 大後頭孔長	—
16. 大後頭孔幅	—
16/7 大後頭示数	—
23. 頭蓋水平周	499
24. 横弧長	—
25. 正中矢状弧長	—
26. 正中矢状前頭弧長	118
27. 正中矢状頸頭弧長	122
28. 正中矢状後頭弧長	—
29. 正中矢状前頸弧長	109
30. 正中矢状頸頭弧長	111
31. 正中矢状後頸弧長	—
29/26 矢状前頭示数	92.37
30/27 矢状頸頭示数	90.98
31/28 矢状後頸示数	—
Vertex Rad.	117
Nasion Rad.	91
Subsp. Rad.	97
Prosth. Rad.	106

表10 顔面頭蓋計測値(mm, 度)(Facial skeleton)

	柿木原 56-1 男性
40. 頭長	102
41. 側頭長	72(右)
42. 下顎長	109
43. 上顎幅	—
45. 頰骨弓幅	[134]
46. 中顎幅	—
47. 頭高	124
48. 上顎高	72
47/45 頰示数(K)	[92.54]
48/45 上顎示数(K)	[53.73]
47/46 頰示数(V)	—
48/46 上顎示数(V)	—
顔面モズルス	—
51. 眼窩高(右)	45
(左)	—
52. 眼窩高(心)	33
(左)	—
52/51 眼窩示数(右)	73.33
(左)	—
54. 鼻幅	28
55. 鼻高	52
54/55 鼻示数	53.85
55(1). 桡狀口高	—
56. 鼻骨長	—
57. 鼻骨最小幅	9
57(1). 鼻骨最大幅	—
60. 上顎齒槽長	59
61. 上顎齒槽幅	66
62. 口蓋長	45
63. 口蓋幅	(36)
64. 口蓋高	12
61/60 上顎齒槽示数	111.86
63/62 口蓋示数	(80.00)
64/63 口蓋高示数	(33.33)
72. 全顎面角	82
73. 鼻側面角	85
74. 齒槽側面角	76

表11 鼻根部計測値(mm、度)(Nasal root)

	柿木原 56-1 男性
50.	前眼窩間幅 17
	鼻根横弧長 21
	鼻根彎曲示数 80.95
57.	鼻骨根小幅 9
44.	両脛窩幅 —
50/44	脛窩間示数 —
	前頭突起上幅(右) 9
	(左) —
	前頭突起水平傾斜角 80
	G-N 投影距離 —
	鼻根角 —
	G-R 距離 —
	重線高 —
	鼻根陥凹示数 —

表13 鎮骨計測値(mm)(Clavicle)

	柿木原 56-1 男性 左
1.	鎖骨最大長 —
2.	骨体彎曲高 14
2 a.	骨体対曲高 35
2(1).	肩峰端彎曲高 —
3.	骨体彎曲弦長 98
4.	中央垂直径 12
5.	中矢状径 15
6.	中央周 44
4/5	鎖骨断面示数 80.00

表12 下顎骨計測値(mm、度)(Mandible)

	柿木原 56-1 男性
65.	下顎間突起幅 —
65(1).	下顎筋突起幅 93
66.	下顎角幅 —
67.	前下顎幅 50
68.	下顎長 —
68(1).	下顎長 —
69.	オトガイ高 35
69(1).	下顎体高(右) 35
	(左) 35
69(2).	下顎体高(右) 32
	(左) 31
70.	枝 高(右) 60
	(左) —
70(1).	前枝 高(右) 63
	(左) 60
70(2).	最小枝高(右) 49
	(左) 49
70(3).	下顎切痕高(右) 14
	(左) —
71.	枝 幅(右) 40
	(左) —
71 a.	最小枝幅(右) 39
	(左) —
71(1).	下顎切痕幅(右) 40
	(左) —
79.	下顎枝角(右) 114
	(左) —
66/65	下顎幅示数 —
68/65	幅長示数 —
68(1)/65	幅長示数 —
69(2)/69	下顎高示数(右) 91.43
	(左) 88.57
71/70	下顎枝示数(右) 66.67
	(左) —
71 a / 70(2)	下顎枝示数(右) 79.59
	(左) —
70(3)/71(1)	下顎切痕示数(右) 35.00
	(左) —

表14 肩甲骨計測値(mm)(Scapula)

	柿木原 56-1 男性 左
12.	関節窩長 36
13.	関節窩幅 29
14.	関節窩深 4
13/12	関節窩長幅示数 80.56
14/12	関節窩曲示数 11.11

表15 上腕骨計測値(mm)(Humerus)

	柿木原 56-1 男性 右
1.	上腕骨最大長 (314)
2.	上腕骨全長 (310)
5.	中央最大径 18
6.	中央最小径 15
7.	骨体最小周 58
7(a).	中央周 59
11.	滑車幅 23
13.	滑車深 25
14.	肘頭窩幅 27
15.	肘頭窩深 12
6/5	骨体断面示数 83.33
7/1	長厚示数 18.47

表16 橫骨計測値(mm) ( Radius )

		柿木原 56-1 男性
	右	左
3.	最小周	— 42
4.	骨体横径	— 16
4 a.	骨体中央横径	— —
5.	骨体矢状徑	— 12
5 a.	骨体中央矢状徑	— —
5(5).	骨体中央周	— —
5(6).	骨下端幅	34 —
3/2	長厚示数	— —
5/4	骨体断面示数	— 75.00
5a/4a	中央断面示数	— —

表17 尺骨計測値(mm) ( Ulna )

		柿木原 56-1 男性
		左
1.	最大長	—
2.	機能長	232
2(1).	肘頭尺骨頭長	—
3.	最小周	36
11.	尺骨矢状徑	—
12.	尺骨横徑	—
S	中央最小徑	12
L	中央最大徑	16
C	中央周	45
3/2	長厚示数	15.52
11/12	骨体断面示数	—
S/L	中央断面示数	75.00

表18 大腿骨計測値(mm) ( Femur )

		柿木原 56-1 男性
	右	左
1.	最大長	448 —
2.	自然位全長	446 —
3.	最大軸子長	435 —
4.	自然位軸子長	425 —
6.	骨体中央矢状徑	28 25
7.	骨体中央横径	28 27
8.	骨体中央周	89 86
9.	骨体上横径	31 30
10.	骨体上矢状徑	26 21
15.	頸垂直徑	34 35
16.	頸矢状徑	27 27
17.	頸 周	102 102
18.	頭垂直徑	49 48
19.	頭 橫 徑	48 48
20.	頭 周	155 152
8/2	長厚示数	19.96 —
6/7	骨体中央断面示数	100.00 92.59
10/9	上骨体断面示数	83.87 70.00

表19 腕骨計測値(mm) ( Tibia )

		柿木原 56-1 男性
	右	左
1.	脛骨全長	— —
1 a.	脛骨最大長	371 —
1 b.	脛 骨 長	356 —
2.	頸頭間距離	345 —
4 a.	上内関節面深	47 —
7.	下端矢状徑	— 38
8.	中央最大径	30 30
8 a.	榮養孔位最大径	34 31
9.	中央横径	19 19
9 a.	榮養孔位横径	24 21
10.	骨 体 周	80 79
10 a.	榮養孔位周	94 87
10 b.	最 小 周	76 70
9/8	中央断面示数	63.33 63.33
9 a/8 a	榮養孔位断面示数	70.59 67.74
10 b/1	長厚示数	— —

表20 股骨計測値(mm) ( Fibula )

		柿木原 56-1 男性
		右
1.	最大長	—
2.	中央最大徑	17
3.	中央最小徑	10
4.	中央周	44
4 a.	最小周	—
4 b.	頸橫徑	—
4 c.	頸矢狀徑	—
4(1).	上端幅	—
4(1 a).	上端矢狀幅	—
4(2).	下端幅	21
4(2 a).	下端矢狀幅	28
3/2	中央断面示数	58.82

表21 推定身長値(cm) ( Estimated stature )

		柿木原 56-1 男性
		Pearson の式 藤 井 の式
上腕骨(右)	161.51	160.85
大腿骨(右)	165.53	165.56
脛 骨(右)	166.81	165.64

## 参考文献

1. Howells, W. W. 1974 : Cranial Variation in Man. Peabody Museum Papers, vol. 67.
2. Martin-Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fisher Verlag, Stuttgart : 429-597.
3. 松下孝幸, 1981 a : 日守地下式古墳出土の入骨。日守地下式古墳群発掘調査(55-1-4号) (宮崎県文化財調査報告書23) : 169-178, 182-183.
4. 松下孝幸, 1981 b : 宮崎県上の原地下式古墳出土の人骨。上の原地下式古墳群発掘調査(宮崎県文化財調査報告書24) : 114-129.
5. 松下孝幸, 他, 1982 a : 宮崎県国富町本庄28号地下式古墳出土の人骨。宮崎考古, 8 : 16-20.
6. 松下孝幸, 他, 1982 b : 鹿児島県諭訪野地下式土塁3号出土の人骨。諭訪野地下式土塁3号(大口市埋蔵文化財調査報告書2) : 11-15.
7. 松下孝幸, 他, 1983 a : 鹿児島県成川遺跡出土の古墳時代人骨。成川遺跡(鹿児島県埋蔵文化財調査報告書24) : 236-261.
8. 松下孝幸, 他, 1983 b : 山口県豊浦郡豊北町上井ヶ浜遺跡出土の人骨。上井ヶ浜遺跡第7次発掘調査概報(豊北町埋蔵文化財調査報告第2集) : 19-30.
9. 松下孝幸, 他, 1983 c : 宮崎県高岡町旭台地下式横穴出土の古墳時代人骨。宮崎県文化財調査報告書, 26 : 78-107.
10. 松下孝幸, 他, 1983 d : 宮崎県都城市菫子野地下式横穴出土の古墳時代人骨。都城・中之城跡、菫子野地下式横穴(都城市文化財調査報告書3) : 105-145.
11. 松下孝幸, 1984 a : 宮崎県野尻町大森地下式横穴出土の古墳時代人骨。宮崎県文化財調査報告書、第27集 : 53-111.
12. 松下孝幸, 1984 b : 宮崎市跡江横穴出土の古墳時代人骨。宮崎考古, 第9号 : 34-48.
13. 松下孝幸, 1984 c : 川内市横岡古墳群2号墳出土の古墳時代人骨。外川江遺跡・横岡古墳高城川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書30) : 142-146.
14. 松下孝幸, 1984 d : 鹿児島県大隅半島の古墳時代人骨。鹿児島考古, 第18号 : 171-181.
15. 松下孝幸, 1984 e : 鹿児島県人口市諭訪野地下式土塁5号墳出土の古墳時代人骨。諭訪野地下式土塁5号(鹿児島県大口市埋蔵文化財発掘調査報告書3) : 15-28.
16. 松下孝幸, 1986 : 鹿児島県串良町岡崎古墳群1号地下式横穴出土の古墳時代人骨。岡崎1号墳・1号地下式横穴(串良町埋蔵文化財発掘調査報告書1)付篇 : 1-16.
17. 松下孝幸, 他, 1986 b : 宮崎県国富町ノ瀬地下式横穴墓群出土の古墳時代人骨。国富町文化財資料、第4集 : 145-185.
18. 松下孝幸, 1987 : 鹿児島県高山町塚崎古墳群出土の古墳時代人骨。鹿児島考古, 第21集 : 57-70.
19. 内藤芳篤, 1973 : 灰塚地下式横穴人骨。灰塚遺跡(九州綱貫自動車道埋蔵文化財調査報告2) : 72-77.
20. 内藤芳篤, 1974 : 人骨とその埋葬方法。大荻遺跡(1)(瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告) : 55-62.
21. 鈴木 尚, 1963 : 日本人の骨。岩波書店, 東京。

A Human Skeletal Remain of the Kofun Period Excavated from Kakinokibaru Tumulus, Miyazaki Prefecture

Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE

[ Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University ]

**Keyword :** Miyazaki Pref., Kofun skeleton, tomb with underground chamber, mesocephaly, narrow and high face, tall stature, slender and long Limb bones

A human skeletal remain of the late phase of the Kofun Period, mature male, was excavated from the tomb with underground chamber at Kakinokibaru Tumuli, Miyazaki city, Miyazaki Prefecture, in 1981. This skeleton was observed and measured anthropologically.

The length-breadth index is (76.02), mescranic (Table 9).

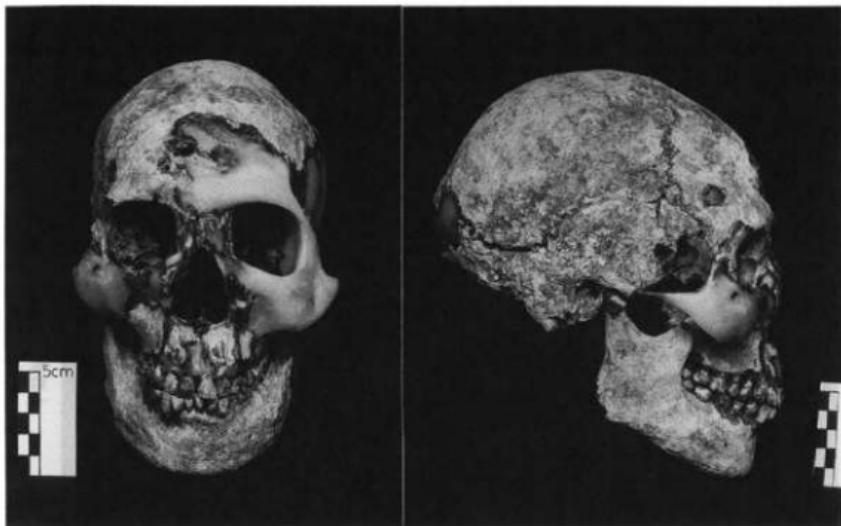
In the face, the bizygomatic breadth is [ 134 ] mm, the facial height is 124 mm, the upper facial height is 72 mm, the facial index is [ 92.54 ] (K.), the upper facial index is [ 53.73 ] (K.) (Table 10).

The estimated stature is 165.53 cm from the right femur.

The artificial extraction of the teeth is not found.

Generally, the bones of the limb are slender and long. The tibiae are flat, but femora are not plumper.

This Kakinokibaru Kofun skeleton with tall stature has the mesocranial skull and the narrow and high face. This characteristic is different from those of the Kofun people in the mountains (Table 2, 3).

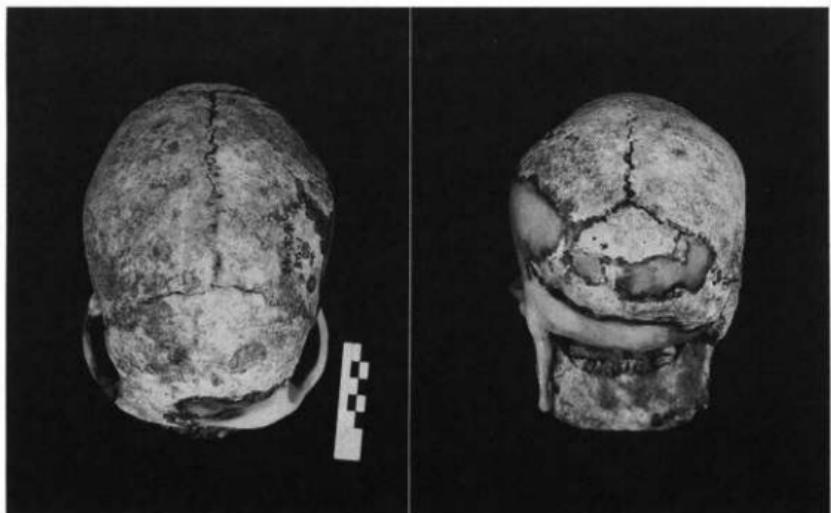


頭蓋前面

( Norma frontalis of the skull )

頭蓋側面

( Norma lateralis of the skull )



頭蓋上面

( Norma verticalis of the skull )

頭蓋後面

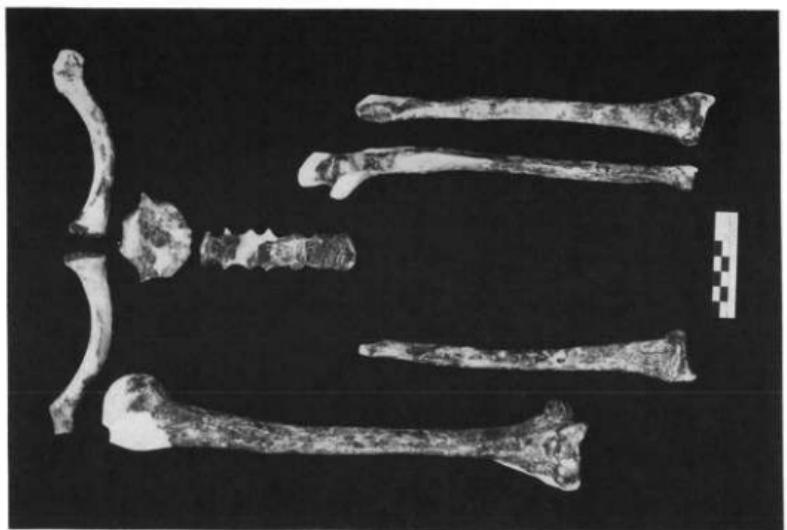
( Norma occipitalis of the skull )

図版 1 柿木原56-1号人骨 (男性、熟年) (1)

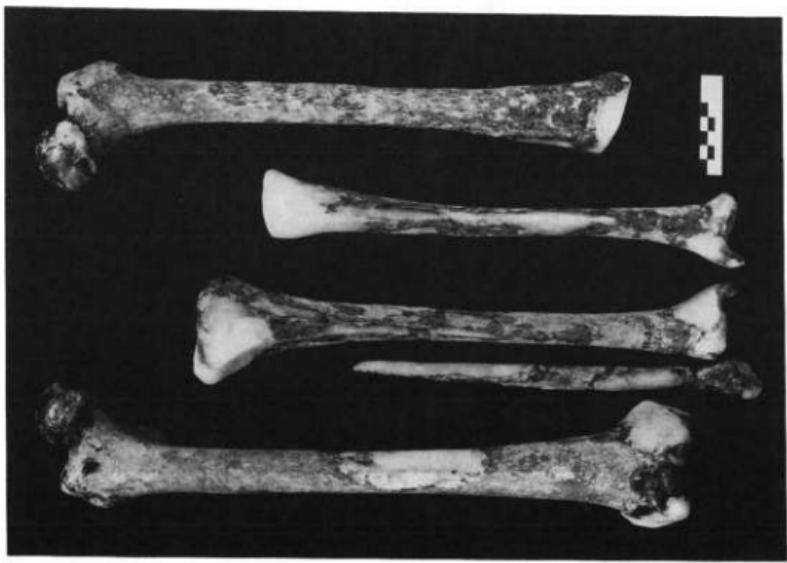
( Kakinokibaru No. 56-1 skeleton, mature male )

上肢骨 (Bones of the upper limb)

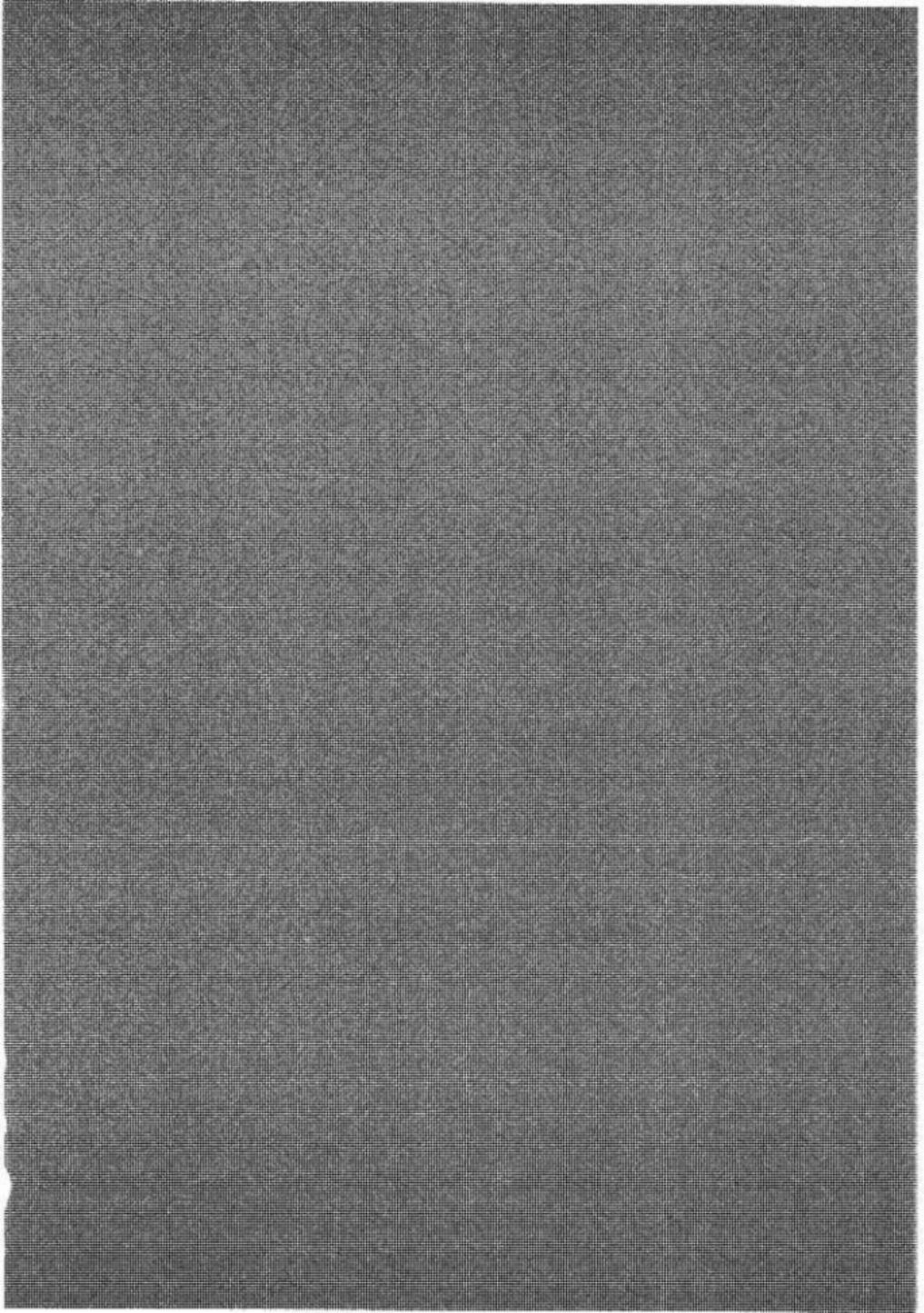
图版 2 桢木原56—1号人骨 (男性、熟年) (2)  
(Kakkinokibaru No. 56-1 skeleton, mature male)



下肢骨 (Bones of the lower limb)



# 江田原第1遺跡



# 本文目次

I.はじめに .....	31
1.発掘調査に至る経過と調査の組織 .....	31
2.遺跡の立地と周辺遺跡 .....	31
3.調査の概要（調査日誌抄） .....	35
II.遺構について .....	36
1.土層 .....	36
2.溝状遺構 .....	36
3.竪穴状遺構 .....	37
4.円形土壙 .....	37
III.遺物について .....	38
1.石器・上製品 .....	38
①磨製石斧 .....	38
②石錐 .....	38
③十鍾 .....	39
2.土器 .....	39
①変形土器 .....	39
②小型変形土器 .....	42
③十節器環 .....	42
④布痕土器 .....	43
⑤須恵器 .....	44
3.小結 .....	45
IV.おわりに .....	45

# 挿図目次

第1図 江田原第1遺跡周辺の主要遺跡分布図 .....	32
第2図 江田原第1遺跡発掘区域と周辺 .....	33
第3図 遺構実測図 .....	36
第4図 溝状遺構実測図 .....	36
第5図 円形土壙実測図 .....	37
第6図 石器・上製品実測図 .....	38
第7図 出土土器実測図 .....	40
第8図 出土土器環実測図 .....	41
第9図 出上布痕土器・須恵器実測図 .....	44

## 図版目次

図版 1	発掘調査風景	47
図版 2	西側発掘区	47
図版 3	西側発掘区遺物出土状況	48
図版 4	円形土壙検出状況	48
図版 5	竪穴状遺構遺物出土状況	49
図版 6	遺跡全景	49
図版 7	竪穴状遺構全景	50
図版 8	円形土壙遺物出土状況	50
図版 9	土器・土製品・石器	51
図版 10	布痕土器・須恵器	52

## I. はじめに

### 1. 発掘調査に至る経過と調査の組織

昭和62年4月、宮崎市吉村町在住の[ ]より、氏の所有する陶芸工房（宮崎市吉村町江田原212-1）の敷地内を整地中に出土したという土器片が、宮崎県埋蔵文化財センターに持ち込まれ、そのことが、県教育委員会文化課を通じて、宮崎市教育委員会文化振興課に伝えられた。そのため、文化財専門嘱託員の伊東但が、県文化課の北郷泰道氏とともに現地調査を行ったところ、地表から約50cm下に土器片などが多く包含されており、遺跡の存在を確認したので[ ]に対し、埋蔵文化財の保存・保護について説明を行い、協力してもらうようお願いした。その後、昭和62年5月8日付で[ ]より遺跡発見届が提出された。

当初は、県文化課、市文化振興課ともに現状のまま保存するのが望ましいという方向で対応していたが、[ ]から、将来同敷地内に新たに工房を建築する計画があるため、発掘調査をしてほしいという強い要望があり、またこの一帯は從来から遺跡の分布が予想されていたところであり、この遺跡の規模・性格などを把握しておく必要性も認められたので、発掘調査を実施することになった。

調査は、宮崎市教育委員会が主体となって、昭和62年6月1日から6月12日までの日程で行われた。調査関係者は次の通りである。

調査主体	宮崎市教育委員会
教育長	榎木崎 敏
教育局長	蛇原 啓次
文化振興課課長	野田 卓郎
同 課長補佐	長瀬 信義
同 係長	野間 重孝
同 主事	浅井 清
同 嘱託	伊東 但
同 嘱託	荒武 麗子

現場作業員

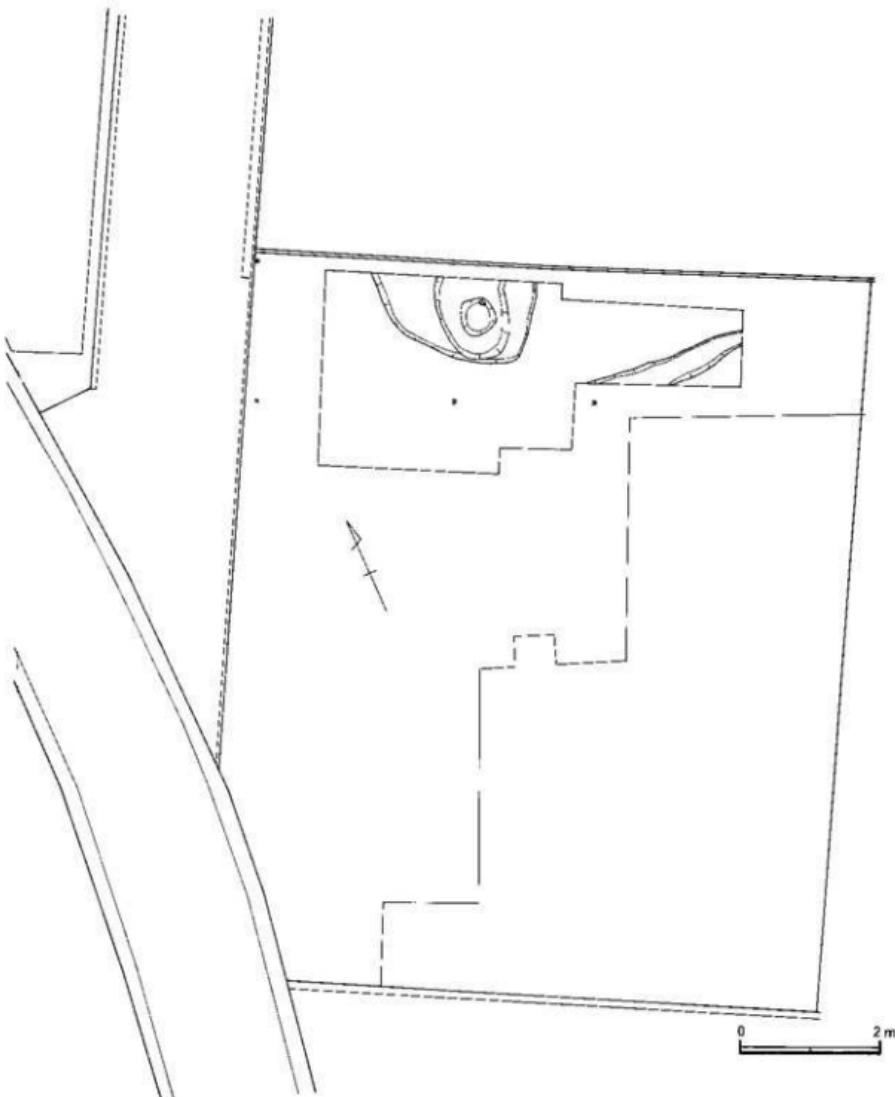
### 2. 遺跡の立地と周辺遺跡

江田原第1遺跡は、（注1）宮崎市吉村町江田原212-1に所在し、一般に櫛（あおき）と呼称されている地域にある。この一帯は、宮崎市街地の北方、大淀川によって形成された4本の砂丘列の一つで、内陸よりの第1砂丘（注2）に立地している。この砂丘上には多くの弥生時代から古墳時代の遺跡が分布している。

この遺跡の南、約200mには宮崎市立櫛中学校があるが、ここは櫛遺跡として知られているところである。櫛遺跡（櫛中学校遺跡）は、昭和26・27年に中学校の校庭から竈檜が2個発見され、（注3）昭和31年には板付Ⅱ式土器を伴った敷石住居が発見されており、（注4）宮崎県



第1図 江田原第1遺跡周辺の主要遺跡分布図



第2図 江田原第1遺跡発掘区域と周辺

内では数少ない弥生時代前期に比定される代表的な遺跡である。弥生時代中期から後期にかけての遺跡では、浮ノ城の墓地造成中に弥生中期の壺形土器（朝顔形口縁）のほぼ完形のものが出土したという記録があり、(注5)昭和30年12月には、大島町（現・宮崎東小学校敷地内）から2個の壺棺（朝顔形口縁）が出土している。(注6)その他第1砂丘上の遺跡として元村

遺跡、宮大牧場遺跡などがあげられ、(注7) 第2砂丘上ではあるが、近くには石神遺跡が所在している。

古墳時代の遺跡としては、冬至遺跡(宮崎市立樺小学校付近)、引土遺跡、樺1号墳(市立樺中学校南側)などがあげられる。(注8)

また、江田原第1遺跡の立地している第1砂丘の西の低地には、現在水田が広がっているが、ここには、昭和60年6月~10月に発掘調査を行った浮ノ城遺跡(水田跡)が所在している。

- 注1. この遺跡の名称について、当初「江田原遺跡」を考えていたが、「宮崎市史統編(上)」の中で「江田原住居跡」として樺中学校遺跡を紹介する文章があったため、混乱を避けるため「江田原第1遺跡」とすることにした。今後、江田原地区で遺跡が発見された場合はこれに統けて、第2、第3、と表わすこととする。
- 注2. この砂丘の呼称方法は、研究者によってまちまちである。ここでは鈴木重治氏の方法を採用し、砂丘が成立した順に内陸の方から第1、第2…と呼ぶことにした。
- 注3. この「樺遺跡」という名称は通称である。発掘調査当時の文献にも「樺遺跡」という表現はない。樺という地域は旧樺村全体をさすものでかなり範囲が広く、一つの遺跡の名称とするには難がある。今後はこの遺跡を「樺中学校遺跡」と呼びたい。
- 注4. 石神遺跡発掘調査報告書の中で、鈴木重治氏は「…板付Ⅱ式土器を供献資料として確認した石蓋上壙…」と記しておられる。
- 注5. 「遺跡周辺の研究概史(石川恒太郎)」石神遺跡発掘調査報告書所収による。
- 注6. 「宮崎市史統編(上)」によれば、昭和30年12月に大宮小学校の分校を建設する際に発見されたとある。この大宮小学校分校は、現宮崎東小学校である。昭和61年発行の「浮ノ城遺跡」発掘調査報告書では「大島火切塚遺跡」として分布図に載せている。
- 注7. 「遺跡の立地と周辺の遺跡(鈴木重治)」石神遺跡発掘調査報告書所収による。
- 注8. 注7に同じ。なお、全国遺跡地図の中で「樺小学校遺跡」とあるものが、所在地を「吉村町冬至」と記しており、このことから冬至遺跡は樺小学校遺跡と同一と判断し、冬至遺跡の所在地を宮崎市立樺小学校付近とした。引土遺跡については所在地を確認できなかった。

参考文献：宮崎県文化財調査報告書 第四輯 宮崎県教育委員会

宮崎市史統編(上) 昭和53年3月 宮崎市

石神遺跡発掘調査報告書 宮崎市文化財調査報告書第1集 1973

宮崎市教育委員会

吉村第二土地区画整理事業に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書 浮ノ城遺跡

昭和61年3月 宮崎市教育委員会

全国遺跡地図

文化庁

### 3. 調査の概要（調査日誌抄）

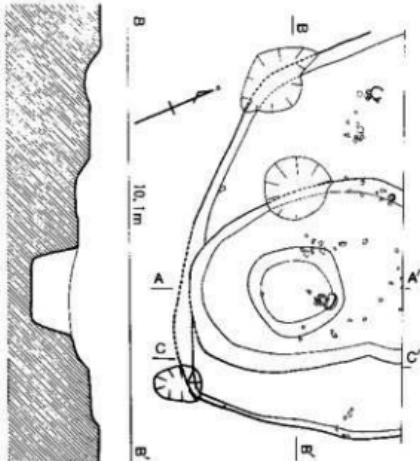
- 1987年 6月 1日 午前 9 時に文化振興課に集合、器材を車に積んで現場へ。幅 1 m のトレーナーを東西・南北の 2 本入れ、午後から東西トレーナーの北側を拡張した。
- 6月 2 日 東西トレーナーの南側を拡張。南北トレーナーの南端には遺構が見られず、埋め戻すこととした。基準高（B・L）を 2ヶ所に設置。
- 6月 3 日 方形状の黒色プラン（住居跡？）が見えはじめる。
- 6月 4 日 東側発掘区で溝状遺構が検出された。昨日の黒色プランとあわせて平板測量（1/50）を行う。
- 6月 5 日 地表面の乾燥が著しく、遺構の検出に苦慮する。東側発掘区の北壁に沿って磨製石斧が出土。西側発掘区では石錐が出土した。
- 6月 8 日 中央発掘区の北側に住居跡？のコーナーがのびているため、隣家のブロック塀ぎわまで下げたが、近年の搅乱があり、遺構面が切られており、そのため土層壁面を見ても立ち上がりは不明瞭であった。西側発掘区では、ごみ穴による搅乱が意外に深く、遺構の床面に切り込んでいた。タテヨコ 1 m の方眼を組んだ。
- 6月 9 日 激しい雨のため、作業を中止する。
- 6月 10 日 土器の取り上げを行い、図面にそのポイントとレベルを記入。（1/50）
- 6月 11 日 遺構の掘り下げをはじめ。住居跡と思われる方形竪穴の床面に遠景のプランが現れたので、それを掘り進める。黒色の埋積土が、かなり深くなる様子である。中央発掘区の土層を図にとり、写真撮影を行う。
- 6月 12 日 円形土壙の掘り上げを続行。深さ 50 cm 位で、床が見えはじめた。床面近くの北壁に甕が埋められている。遺構の実測、写真撮影、遺物の取り上げを並行して行う。
- 6月 13 日 全景写真を撮影し、調査を終了した。

## II. 遺構について

### 1. 土層

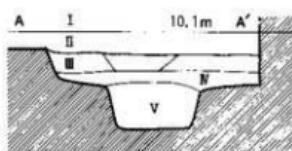
この遺構は砂丘上に立地しているため、自然な状態では土層の堆積物は全て砂層からなっている。I層は表上であり、約5cmの厚さで堆積している。乾燥状態ではクリーム色に近い白色をしており、粒子の細かい砂層である。調査対象地の南側ではこのI層はほとんど削平されている。II層は30cm~40cmの厚さで、茶褐色砂層である。III層は10cm~20cmの厚さで堆積しており、黄味を帯びた褐色砂層である。IV層は厚さ30cmほどで、黒色砂層である。V層はやや粗い粒子の黄色砂層である。

遺構はIII~IV層に掘り込まれており、後述する堅穴状遺構の埋積土は黄色砂の混じった黒褐色砂層からなっており、円形土壙の埋積土は黄色砂がほとんど混じっていない黒褐色砂層である。



土層名

- a 黒色砂質層
- b 黑茶色砂層
- c 黑茶色砂  
(黄色砂混)層

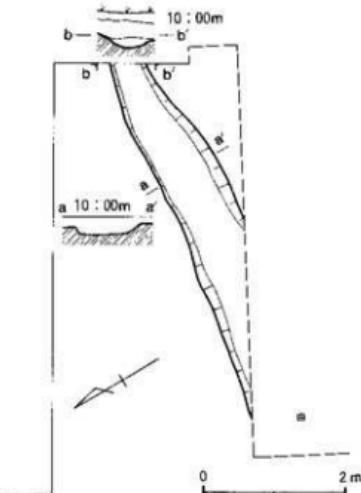


第3図 遺構実測図

### 2. 溝状遺構

東側発掘区III層上面において、黒く帶状にはば東西に延びる溝状遺構が検出された。この断面の土層を観察すると、III層中に凹状に掘り込まれて、黒色砂が堆積している状況であった。

溝の方向を確認するため南西側に発掘区域をひろげてみたが、この方向には検出されな



第4図 溝状遺構実測図

かった。したがって溝状遺構は南に屈曲し、建物の下に延びていくことが推測される。

溝は最大幅が約1m、最小幅が0.5mである。遺物としては、土師器・須恵器片が埋積土上面～埋積土内から出土していた。

### 3. 壊穴状遺構

Ⅲ層上面まで掘り下げた段階で遺物が出土はじめ、黒色プランが不明瞭ながらも見えはじめた。Ⅲ層上面の遺物を取り上げた後、更にその面を割り出してみると、住居跡と思われる方形のプランが検出された。その段階では住居跡の重複造溝かと考えていたが、掘り下げてみると切りあい状況が不明確な楕円に近い隅丸方形状の壊穴状遺構が現われた。遺構の大部分は調査地区の北側の隣家にのびている。そのため遺構の全貌を明らかにすることはできなかった。柱穴と思われるようなビットや炉跡と思われるような炭化物、カマド等の施設は検出されていない。

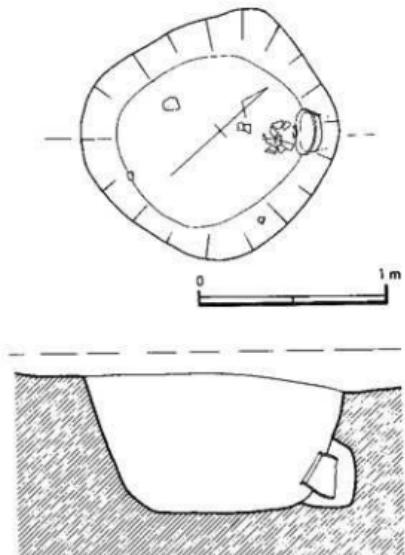
規模は、東西約5.7m、南北約3.0mで、プランの2/3以上が隣家の下に埋まっているため正確な平面規模はわからない。深さは、床面と思われる面まで約20cmである。遺物は床面に貼り付いた状態でなく、埋積土（黄色砂混黒褐色砂層）の上面に浮いたような状態で出土する。

上層断面の観察結果からは切り合い関係を明確に確認することができず、後述する円形土壙以外の切り合い関係を確認できなかった。平面プラン上において東側コーナーに、若干別の遺構との切り合い関係が見られるが、これだけでは壊穴状遺構が存在したというだけで、それが

重複遺構であるのか、単一の遺構であるのかどちらであるとも言えず、住居跡であるのか確定できない状況であった。

### 4. 円形土壙

壊穴状遺構の床面確認の段階で、そのほぼ中央部に一段床が落ちて楕円状に凹んでいるのが検出された。掘り下げてみると、その深さは20cmほどで、更にその中央に深さ約70cm～80cmの円形の土壙が検出された。この遺構の埋積土は、壊穴状遺構と基本的に同じであったが、黄色砂が混入しておらず真肅であった。南北上層断面の観察では、壊穴状遺構の埋土中にこの土壙の立ち上がりが確認できた。そのため、当初この二段掘りの円形土壙は壊穴状遺構が埋まった後に掘られたものかと考えていた。しかしその後、壊穴状遺構の埋積土上面に出土する土器の接合状況などから、壊穴状遺構が埋まった後に掘り込まれた可能性は薄くなかった。



第5図 円形土壙実測図

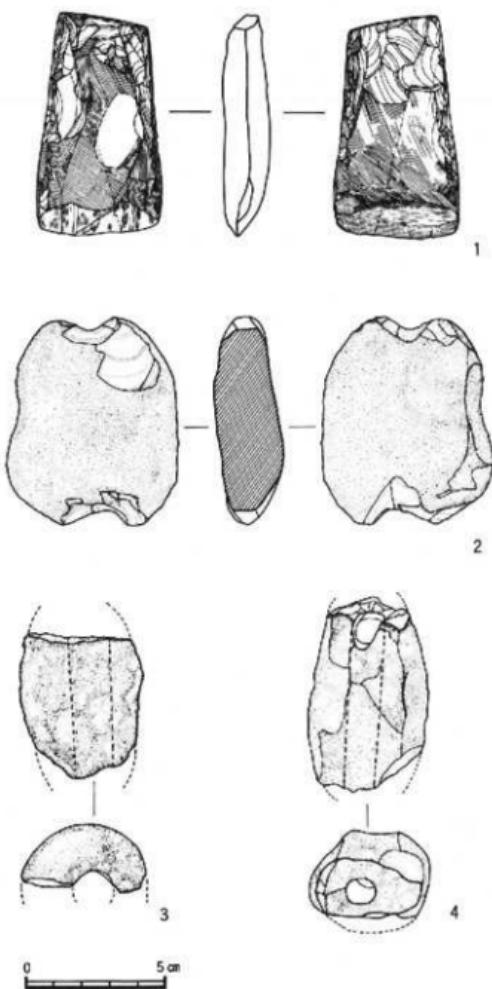
規模は、一段目の竪穴の長径が約3m、短径が約2.5mで、その中の円形土壙は直径が約1.2mである。この土壙の底面の壁には、甕形土器が口縁を外に向けて埋まっており、その底部は打ち欠かれていた。土器の中には黒色砂がぎっしり詰まっていたが、炭化物その他自然遺物が入っている様子は認められなかった。

### III. 遺物について

#### 1. 石器・土製品

①磨製石斧(第6図1)(図版9)  
東側発掘区の北側縁際にトレンチを入れたところ、Ⅱ層下部において小型の磨製石斧が出土した。造構には伴出していない。刃部は両面から磨き出されており、両刃である。基部には大きめの加工が見られ一部欠損している。周縁部には細かい剥離加工がみられ、両面とともにタテ方向および斜め方向の擦痕が多く見られる。刃部には、刃に対して直角に細かい擦痕が見られ、研磨痕ないし、使用痕と思われる。手ざわりはツルツルしている。石質は不明。大きさは縦約8.0cm、横3.1cm~4.4cm、厚さは1.6cmである。弥生時代の所産と思われる。

②石錘(第6図2)(図版9)  
西側発掘区において竪穴状造構のプランが検出された段階で、造構にかかっていない地点のⅡ層下部~Ⅲ層上面から出土した。大きさは、縦7.3cm、横6.2cm、厚さ2.0~2.3cm。扁平な楕円形のやや胴のくびれた小石を使用した錘で、両端に抉りがある。抉りの幅は2.0cm~2.5cmで、深さは0.5cmである。



第6図 石器・土製品実測図

### ③上鉢（第6図3、4）（図版9）

3は、中央発掘区の遺構検出面（Ⅲ層上面）から出土している。大きさは、横幅が約4.3cm、長さ約4.9cm、孔径が約1.2cmであり、半分以上欠損している。胎土は赤褐色粒子を含む精良なもので、焼成は普通で、色調は褐色から黄褐色を呈する。

4は、西側発掘区の搅乱されているあたりで土器に混じって取り上げられた。横幅4.32cm、長さ約6.92cm、厚さ3.035cm、孔径1.04cm×1.03cmである。胎土に細砂粒、赤褐色粒子を含み、焼成は普通で、色調は黄褐色から褐色である。両端を欠損している。

## 2. 土器

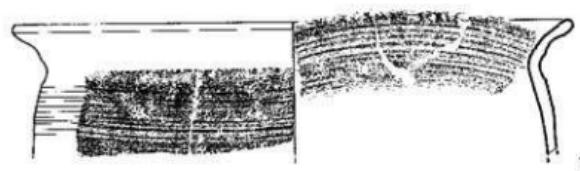
### ①菱形土器（第7図1～3、5）（図版9）

1は、西側発掘区においてⅡ層下部から出土している。口縁部のみ1/3くらいの破片である。胎土は精良で、角閃石、石英などの細砂粒を含んでいる。焼成は普通で、口径は24.6cmが推定される。色調は黄褐色～赤褐色を呈している。器壁は分厚く、外側に大きく開く口縁部で、口唇部にはヨコナデが施されており、そのために端部が上下とも少し肥厚している。外面の調整は器面が剥離しており不明瞭であるが、ナデと思われる。内面はヨコ方向の粗いハケ目調整である。

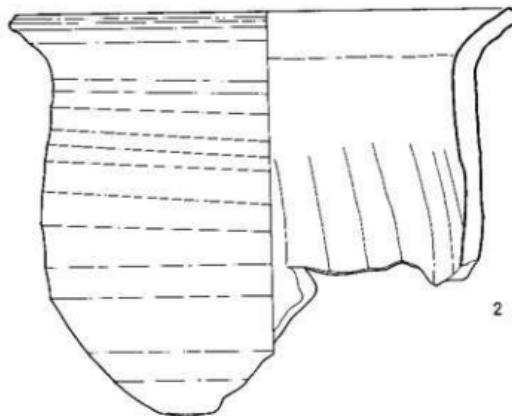
2は、円形土壙の底面の北側壁に口縁部を外に向けて、斜めに埋められていた。底部は欠損しており、打ち欠いたものと思われる。口縁部も2/3ほど欠損している。胎土には黒っぽい細砂粒を多く含み、焼成は普通であるが、もろくなっている。色調は灰褐色から明灰褐色を呈しており、口縁部は27.2cmが推定される。器高は14.5cm～22.6cmを超えるものと思われる。球形の底部からやや内湾さみに胴部上位へと向かい、口縁部で強く外反して開くものである。3に比べて口縁部と胴部の境が明瞭であり、口縁部は短い。口縁部内外面はヨコナデで仕上げ、口唇端部は少し膨らみをもって張り出している。端部はヨコナデのため少し中央が窪んでいる。調整は粗く、外面はヨコ方向に幅広のヘラ状工具によるヨコナデ。胴部内面はヘラによるタテナデ。口縁部内にはナデがみられる。

3は、西側発掘区の北側端の整穴状遺構内Ⅲ層中位から出土した。胎土には粗い砂粒を多く含んでおり、焼成は普通である。色調は褐色を呈しており、口径は21.4cm、器高は17.1cmが推定される。1/2程欠損しているが、口縁部は完全に接合できる。一部では口縁部から底部までそろっており、図面上では復元実測を可能にしている。器面はザラザラしており、もろく剥離し易い。口縁部外面には強いヨコ方向のナデ調整のあとが残っており、口縁部内側もナデが施されている。胴部から底部にかけての内面には、タテ方向へのナデ調整がみられる。球形の胴部から立ち上がって大きく開く口縁をもつ、鉢形に近い菱形土器である。口唇端部は丸く、その上下はヨコナデのため若干窪んでいる。底部は内外面ともに剥離が著しい。

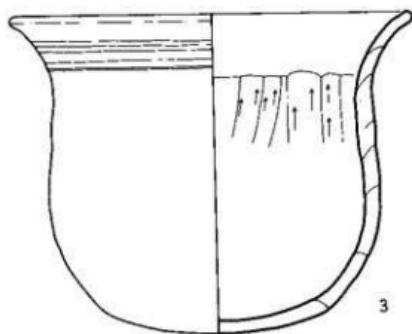
5は、口縁部の破片で、口縁部外面はヨコナデが施され、特に内面は凹線状の条痕がヨコ方向にめぐっている。胴部外面にもヨコナデが施され、凹線状の工具痕が残っている。口縁部は外反し、端部は丸く仕上がっている。胎土に角閃石、石英、赤褐色粒子などの細砂粒を含む。焼成は普通で、色調は黄褐色から茶褐色を呈する。



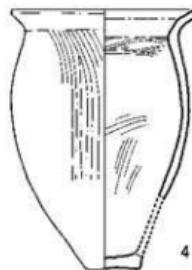
1



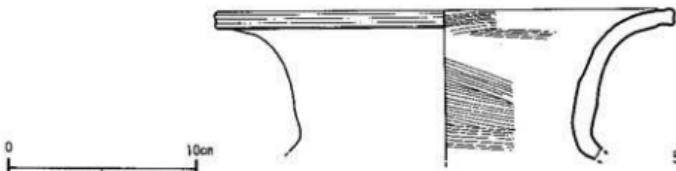
2



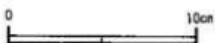
3



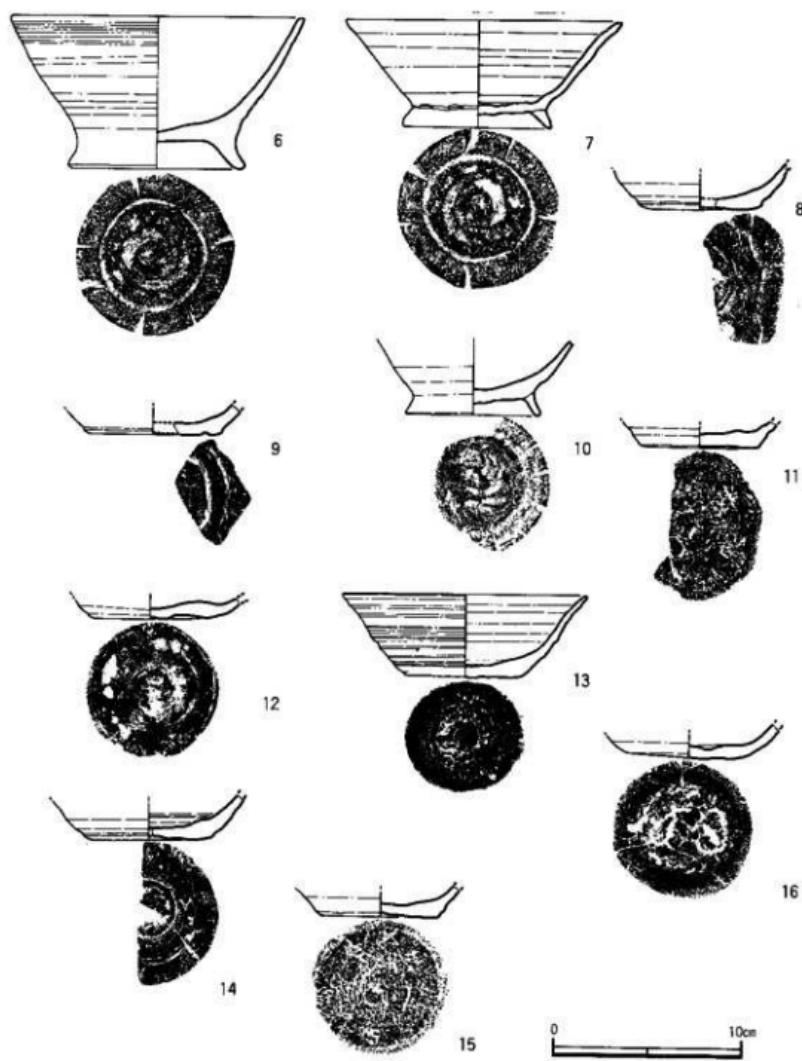
4



5



第7図 出土土器実測図



第8図 出土土師器実測図

## ②小型甕形土器（第7図4）（図版9）

西側発掘区の豎穴状遺構の上面（Ⅲ層下部～Ⅳ層上面）から出土したもので、ほぼ完形に接合できた。胎土に石英など細砂粒を含み、焼成は普通である。色調は赤褐色から黄褐色を呈し、口径は10cm、器高は13.9cmを推定できる。口縁部と底部の一部を欠いている。外面の剥離が著しい。調整は外面にヘラナデが丁寧に施されている。胴部から屈曲して外反する口縁部と肩部の内側にはヨコ方向へのヘラナデが施されている。

## ③土師器（第8図6～16）（図版9）

6、7、10、は高台付の坏である。6は、その中でもやや大きく、口径は15.6cm、底径は9.4cm、器高は8.1cmが推定できる。ほぼ完形であるが、口縁部や高台の一部を欠損している。胎土には砂粒をあまり含んでおらず、きめ細かい精良なものである。色調は赤橙色を呈し、焼成は普通である。器面が剥離しており、調整が不明瞭である。内外面ともに回転によるヨコナデが見られ、高台を体部に貼り付けた際のナデつけが、内外面に残っている。

7は、円形土壙の上面の埋積土から出土したものと、豎穴状遺構の上面から出土したものが、接合した資料である。口径は14.7cm、底径は7.9cm、器高は5.75cmを測る。胎土には、石英を多く含み、焼成は良好である。色調は赤橙色を呈する。内外面ともに回転ヨコナデが施され、高台部と体部の接着部外面ではヘラ先状の工具を押しつけ、爪形状の施文が連続して見られ、その後ヨコナデ調整により仕上げている。

10は、底部のみの破片で1/2ほど欠損している。豎穴状遺構のⅢ層上面から出土した。底径は7.2cmが推定される。胎土には赤褐色粒子を含む。焼成は普通で、色調は淡黄褐色を呈する。外面には回転ヨコナデがみられ、内面はヨコナデである。高台と体部の接合部の内側はヨコナデで仕上げられている。

8、9、11～15はヘラ切りによる平底の坏である。8は、1/3ほどの破片で磨耗が著しいが、内外面に回転ヨコナデがみられる。底はヘラ切り痕が明瞭にのこる。立ち上がりは若干外側に張り出しており、丸く内湾ぎみにのびている。胎土は精良で細砂粒を含み、焼成は良好、色調は明褐色を呈す。底径は6.6cmが推定される。

9は小破片であるが、高台を意識して削り出したと思われるケズリ痕が底部の周縁に沿って観察でき、若干外側に張り出している。胎土は精良で細砂粒を含み、焼成は良好、色調は灰黄褐色を呈す。底径は7.4cmが推定される。

11は1/2ほどを欠損した底部で、張り出しがなく比較的するどく立ち上がっている。底径は6.4cmが推定され、胎土は精良で細砂粒を含み、焼成は良好である。色調は淡橙褐色を呈する。

12は、回転ヘラ切りの痕跡が顕著に残るもので、底部からの立ち上がりがやや丸みを帯びて、体部との境に丸く段がついたりする。底部は完存しており、底径は6.3cmである。胎土は精良で、細かい砂粒を若干含み、焼成は良好。色調は橙褐色を呈する。

13は体部から口縁部にかけて1/2弱ほど欠くが、ほぼ完形に復原できるものである。7と同地点で出土している。底部は小さく、回転ヘラ切りの痕跡が明瞭な半底である。体部への立ち上がりは若干丸みを帯びており、底部と体部との境に丸く段がついたりする。内外面ともに回

転ヨコナデによって丁寧に整形されている。胎土に細砂粒を若干含み、焼成は良好、色調は橙褐色である。口径は13.0cmが推定され、底部は6.1cm、器高は約4.45cmが推定される。

14は1/2ほどの破片で、底部に回転ヘラ切りの痕跡が明瞭に残っている。立ち上がりが丸みを帯び、底部と体部の境に丸く段がつき、若干外側に張り出している。やや丸底ぎみである。胎土は精良で細砂粒を含み、焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。底径は6.6cmが推定される。

15は、底部のみが完存しているもので、回転ヘラ切りの痕跡が明瞭に残り、中央が強く削られて済んでいる。立ち上がりが若干丸みを帯びて、少し外方に張り出しがみの部位があつたりする。胎土は精良で細砂粒を含み、焼成は良好である。色調は外面が淡黄褐色、内面が淡赤褐色を呈する。底径は6.1cm～6.2cmである。

16は、丸底気味の平底の完存する底部であるが、他の例と違って底部をヘラで深く抉ったように切り離しており、その後の整形は施されていない。内外面ともに回転ヨコナデを施す。胎土は精良で、細かい砂粒を若干含み、焼成は良好、色調は赤灰褐色である。底径は6.6cmである。

#### ④布痕土器（第9図17～21）（図版10）

布痕土器はごく小さなものを含めて、394点の出土があった。Ⅱ層上面の段階では遺跡の西側に少量出土するのみで、Ⅲ層～Ⅳ層の段階で遺跡の中央区に比較的集中してくるようである。

17は、中でも大きい破片で分厚いものである。外面はナデで、口縁端部のケズリはあまり明瞭でない。胎土は精良で、焼成は良好、色調は赤褐色である。

18は、薄手で口縁端部を斜めに切り取っている。胎土は精良、細砂粒を含み、焼成は良好。色調は赤褐色を呈する。内面は磨耗が著しく、布目がほとんど不明。

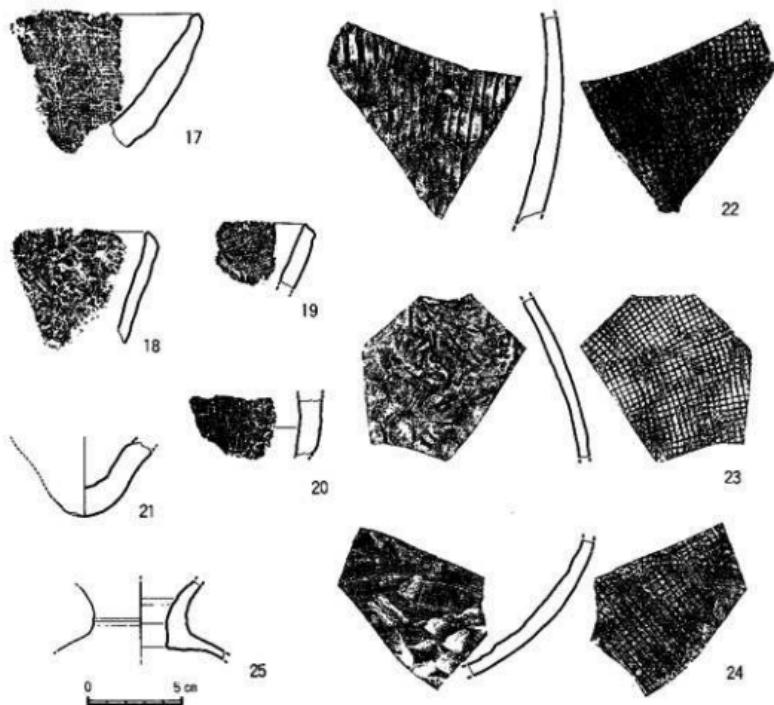
19は、きわめて小さい破片だが布目が明瞭で、口唇端部に粘土を貼り付けて外面に突出させ、口唇部はナデにより少し窪んでいる。外面はナデである。胎土は精良で、細砂粒を含み、焼成は良く、色調は赤褐色を呈する。

20は、体部片である。布目が非常に細かく、下位で布が重なって絞り状のシワがみられる。外面は丁寧なナデである。底部に近い部位と思われる。胎土は精良で、細砂粒を含む。焼成は良く、色調は黄灰褐色を呈する。

21は、底部で丸みを帯びた尖底状を呈し、外面はナデである。内面は磨耗しており、布目はあまり明瞭でない。胎土は精良で、砂粒を若干含む。焼成は良好、色調は赤褐色を呈す。

布痕土器の出土量

部 位	重量 (g)	破片数
口 縁 部	637	47
脇 部	1992	272
底 部	161	10
そ の 他	331	65
総 計	3121	394



第9図 出土布痕土器・須恵器実測図

⑤須恵器（第9図22～25）（図版10）

須恵器は、全体で12点の出土をみた。22は、大型の壺の破片で外面に細かい格子目のタタキ、内面に粗い平行線のタタキが施されている。胎土は精良で、細砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は灰褐色を呈する。

23は、器壁が薄く、外面に細かい格子目のタタキが明瞭に施されている。内面はタタキがあり明瞭でなく、タタキの後ナデが施されているようである。胎土は精良で、焼成は良好、色調は灰褐色を呈する。

24は、底部に近い破片と思われる。外面は細かい格子目のタタキがみられ、内面はヨコナデが施され、下位にヘラ状工具でヨコ方向に調整を施している。胎土は精良で、焼成は良好、色調は灰褐色を呈する。

25は、小壺の頸部から肩部にかけての土器片で、口縁部や胴部は欠損している。Ⅱ層上面から出土した。内外面ともに、ロクロによる回転ヨコナデで調整され、肩部の内面はナデが施されている。肩部外面には自然釉がみられる。胎土は精良で、細砂粒を若干含む。焼成は良好で固く締まっている。

### 3. 小結

石器については、石斧は前述したように弥生時代のものと思われる。出土状況から判断すると、搅乱の形跡はなかった。砂丘上に立地する遺跡出土の遺物としては興味深い資料である。石錘は時期は特定できないが、土錘も含めて、土器類とそう変わらない時期のものではないか。

土器については、壺形土器、小型壺形土器と土師器坏とに分けられる。壺形土器は4個出土しているが、器形はほぼ同じで時期的にも同じものである。土器製作過程における粘土紐の積み上げの様子が比較的よくわかる。市内では浄土江遺跡出土の土器に類似しているが、土器の形成や調整に関して当遺跡出土の壺形土器は丁寧に造られている。小型壺形土器は極めて薄く丁寧に仕上げられたもので、ミガキ様のヘラナダが施されていた。器形的には、壺形土器と共通するものがあるが、時期的には古いものようである。土師器坏は、すべてヘラ切りであり、平底のものと高台付きのものとがある。大きさによって、大体3種類に分けることができる。

高台付きのものは、平底のものよりも大きめである。しかしその大きさにはややバラつきがあり、あまりまとまっていない。平底のものは、殆ど大きさが平均しており、大きいものと小さいものとにはっきりわかっている。底の張出しがあるものほど大きいようである。

他に布痕土器、須恵器が出土している。布痕土器は完形のものは全くなく、大きい破片よりも小さい破片の方が多い。個数では394個ほど出土しているが、それはあまり意味を成さないと思われたので、別表のように重量を計ってみた。他の土器と比較してそれほど少ない出土量とは思われない。

## IV. おわりに

江田原第1遺跡は、立地的に大変興味ある遺跡である。特に櫛中学校遺跡との関連において期待を抱かせるものがあった。狭い範囲の調査であったが、遺跡は北側にも広がりを見せており、将来的に楽しみな遺跡である。

調査の結果、櫛中学校遺跡との関連を思わせるものは石斧のみであったが、砂丘がかなり長期間にわたって人々の生活の場となっていたことを知ることができた。

この遺跡の時期は、古墳時代の終末期から奈良、平安時代にかけてではないかと考えておきたい。極めて新しい要素を持つ土師器坏も中には含まれるのであるが、古墳時代終末期と思われる資料も混じっている。今後多くの資料にあたってみたいと考えている。

遺構については、遺物に若干幅があるようと思われるため、時代を決めかねるが、平安時代初めごろより遡るものではないだろう。

なお、この時期の遺跡では必ずと言ってよいほど布痕土器が多量に出土しているが、完形品に乏しいため、全体的な遺物に占める割合は、小さいものではないにも係らず、ごく小さい取扱いしかされていないようと思われる。小さい破片が多いため個数では比較の対象にはなり難い。試みとして重量を計ってみたが、他の土器類の重量を出してないので片手落ちの感を免れえないが、今後そういう細かな作業も必要ではないかと思われる。





図版1 発掘調査風景



図版2 西側発掘区



図版3 西側発掘区遺物出土状況



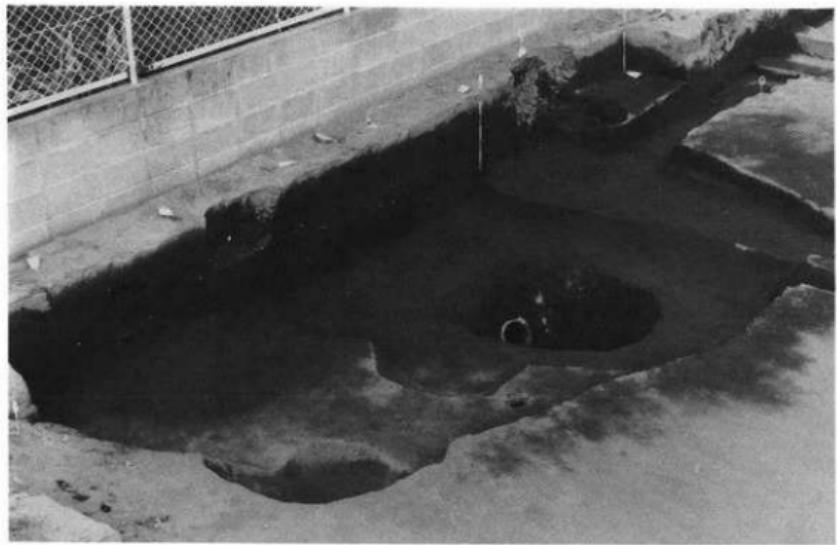
図版4 円形土壤検出状況



図版5 壁穴状造構造物出土状況



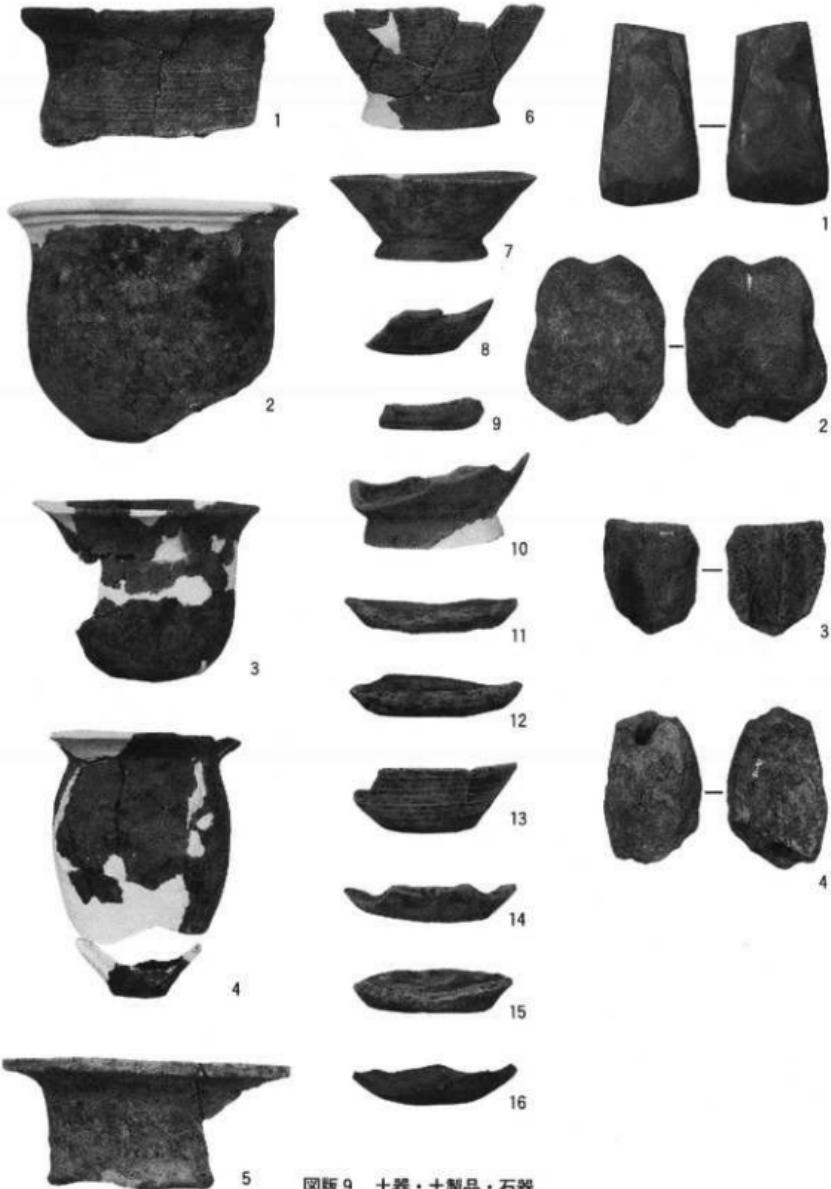
図版6 遺跡全景



図版 7 穂穴状遺構全景



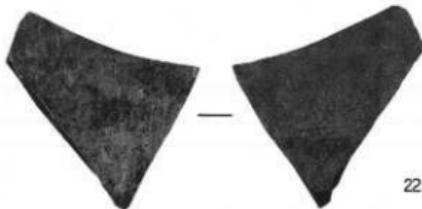
図版 8 円形土壤遺物出土状況



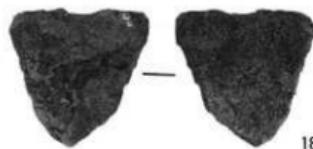
圖版 9 土器・土製品・石器



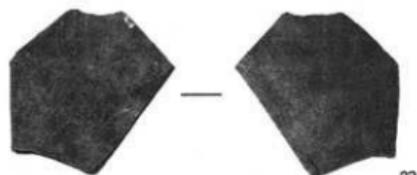
17



22



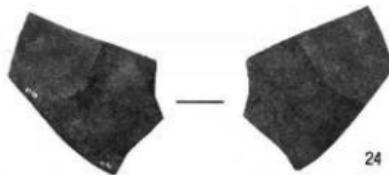
18



23



19



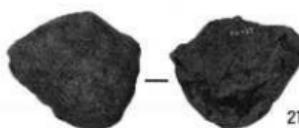
24



20



25



21

圖版10 布痕土器・須惠器

柿木原地下式横穴墓56-1号

江田原第1遺跡

宮崎市文化財調査報告書

平成元年11月

発行 宮崎市教育委員会

印刷 愛文社印刷所